植生史研究　特別第2号 p. 151–180　　2006年11月　　Jpn. J. Histor. Bot.

星　雅之[1]・茅野嘉雄[2]：十和田中掫（ちゅうせり）テフラからみた円筒下層a式土器成立期の土器様相

Masayuki Hoshi[1] and Yoshio Chino[2]: Pottery types at the formation phase of type a lower cylindrical pottery and the fall of Towada Chuseri tephra during the early Jomon period in northern Japan

要　旨　十和田中掫テフラは，縄文時代前期において十和田火山の巨大噴火によってもたらされたテフラで，従来から青森県南東部～岩手県北部において顕著に確認され，当該地域の発掘調査では遺跡の年代や文化層把握の指標とされている。この十和田中掫テフラは，辻誠一郎氏などによる近年の研究成果により，三内丸山遺跡に代表される円筒式土器文化の形成と拡大に密接な関わりを持つ可能性が推定されている。筆者達は平成15年度三内丸山遺跡特別研究推進事業の一環として行われた総合研究『三内丸山遺跡の生態史研究—とくに円筒土器文化の形成と変容・終焉—』の中で，十和田中掫テフラの考古学年代解明を目的として同テフラの上下から出土する土器の模索を行った。その結果，円筒下層a式土器は十和田中掫テフラの上位である可能性が高く，また同テフラが前期大木式土器との並行関係解明の鍵層となることが推定された。本稿では，遺跡事例からみた十和田中掫テフラの実態を把握し，円筒下層a式土器の直前期や並行期の土器について考察を行うものである。
キーワード：円筒下層a式，北日本，縄文時代前期，前期大木式，十和田中掫テフラ

Abstract　Towada Chuseri tephra (To-Cu) derived from a gigantic eruption of Towada volcano during the early Jomon period covered southeastern Aomori and northern Iwate prefectures in northern Japan and is regarded as a good marker for the archaeological dating of this period in these areas. According to recent studies by Dr. S. Tsuji, the fall of this tephra affected the formation and spread of the cylindrical pottery culture in northern Japan. To clarify the importance of the tephra fall on the Jomon culture in this area, we compared pottery types before and after the tephra fall. We found that type a cylindrical pottery appeared above To-Cu and that the tephra is a good key layer contemporaneous with the early types of Daigi pottery. Here we describe occurrences of To-Cu at archaeological sites in this area and discuss pottery types prior to and contemporaneous with type a lower cylindrical pottery.
Key words: Daigi type potter, early Jomon period, northern Japan, Towada Chuseri tephra, type a lower cylindrical pottery

はじめに

縄文時代前期中葉に降下した十和田中掫テフラ（To-Cu）は，十和田カルデラを給源とするテフラで，青森県南東部から岩手県北部において顕著に確認され，当該地域の発掘調査においては遺跡の年代や文化層を知る指標とされてきた。十和田中掫テフラ（以後To-Cuと呼ぶ）の分布は，調査事例の増加に伴い従来周知されていたより遠方の地域からも確認されることがわかってきた。

To-Cuが降下した縄文時代前期の東北地方は，北部中心に分布する円筒下層式土器文化と南部中心に分布する大木式土器文化に二分され，岩手県と秋田県を横断する北緯40°線付近が大凡両者の接触地域と考えられている。近年のTo-Cuの降下年代に関する年代測定結果などから，円筒土器文化の成立がTo-Cu降下直後に始まり，併せてTo-Cuの降下が三内丸山遺跡に代表される円筒土器文化の形成と拡大に密接に関係する可能性が極めて高いことがわかってきた。すなわち，To-Cuの降下時期を限定することで，当該期に東北地方を二分する円筒式・大木式両者の並行関係解明の手掛かりになるものと思われ，併せて長い間懸案事項となっている円筒下層a式の直前型式の実態についても，To-Cu下位相当の土器を検討することで，その指標を示せる可能性が考えられる。

本稿では，発掘調査事例からみたTo-Cuの分布や内容を明らかとした上で，To-Cu降下期前後の土器を抽出・検

[1] 〒020-0853 盛岡市下飯岡11地割185番地　財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
Agency for Cultural Promotion Iwate Prefecture, Shimo-iioka, Morioka 020-0853, Japan
[2] 〒038-0042 青森市新城字天田内152-15　青森県埋蔵文化財調査センター
Aomori Prefectural Archeological Artifacts Research Center, Amadanai, Shinjo, Aomori 038-0042, Japan

討し，円筒下層a式土器を巡る土器様相について考えてみたい。また，本稿で取り上げるTo-Cuの考古学年代は，円筒下層a式土器と大木式土器の併行関係や円筒下層a式の直前型式の内容に強い関わりを持つので，先にそれらを扱った論考や調査事例などを挙げ，その研究史を整理してみる。なお，本稿で使用している市町村名は平成16年段階のものである。

1．円筒下層式と前期大木式の並行関係に関する論点の整理

円筒式と大木式の並行関係について，両型式の設定者である山内清男博士は，円筒下層a式に対して大木1式が並行する見解を示した。ところが，実際の発掘調査からは円筒下層a式と大木1式の並行関係を明確に支持できる資料は得られていないと捉えられる。その後，多くの先学により土器の型式学及び層位的共伴資料（主に竪穴住居・土坑・包含層などの共伴資料）から円筒下層a式と大木式の並行（併行）関係について論じられてきたが，明確な解決をみていない現状がある。それらの研究史や内容については，富樫泰時氏や石岡憲雄氏のまとめたものが詳しい（富樫，1993；石岡，1999）。この中で富樫氏は北海道や秋田県の事例から，円筒下層a式に大木3式，円筒下層b式に大木4式が併行関係になる可能性を指摘している。相原淳一氏は，円筒下層a式・円筒下層b1式に対して大木2a式ではないかと考察し（相原，1990），杉山武氏は青森県階上町白座遺跡より円筒下層a式に伴い出土した大木系土器を円筒下層a式と大木2a式の折衷型式として仮称「白座式」と命名している（杉山，1989）。工藤大氏は，青森県木造町田小屋野貝塚報告書中において，円筒下層a式に大木2式が並行すると予察し，併せて仙台湾周辺資料の中に大木2a式と大木2b式の分層発掘された事例が無いことを取り上げ，両者に時期差が存在するのか疑問を呈している（工藤，1995）。名久井文明氏や大沼忠春氏は，円筒下層a式に対して大木3式が並行する可能性を言及し（名久井，1971；大沼，1985），武藤康弘氏は円筒下層a式が大木2a式より新しいとの見解を示している（武藤，1991）。

上述してきた円筒下層a式と大木式の併行関係について研究史を整理すると，円筒下層a式に対して①大木1式とする説，②大木2a式とする説，③大木2a式と大木2b式をあえて区分せず幅を持たせて大木2式とする説，④大木3式とする説に分かれる。

円筒下層式土器と大木式土器の接触地域は，大木1～4式のまとまった資料自体が少なく，特に大木3・4式は希少性が高い。資料が少ないことに起因して，土器の型式内容・属性自体不明瞭なことも両者の並行関係の特定を困難にする問題点と思われる。

2．いわゆる深郷田式についての諸問題

円筒下層a式の直前型式の一つと考えられている深郷田式は，青森県中里町深郷田遺跡出土土器に対して1941年白崎高保氏が命名した。その後，佐藤達夫氏などにより補足が試みられ，また名久井文明氏の芦野遺跡第2群土器などがこれに相当すると考えられている。深郷田式の位置づけとしては，早稲田6類に後続し円筒下層a式に先行する土器として捉えられているが，その型式内容や編年的位置づけを含めて不明瞭な要素が多い。武藤氏は東北地方北部の土器資料をもとに該期の編年を提示し，これらの土器群を第1～3類に分類した上で大木2a式に並行するとしている（武藤，1991）が，この中の第3類が青森県の日本海側を中心に分布する深郷田式と呼ばれる土器の一部を含むと理解される。青森県の調査事例からは上記したとおり日本海側（主に津軽地方）に事例がややまとまるものの良好な資料が依然少なく，また，太平洋側で数例の出土が報告されているが，日本海側で出土するものと器形などいくつかの点で違いが見られる。岩手県北部の調査事例をみると，その報告書中に深郷田式と記述されている土器は散見されるが，本来の深郷田式に相当するものか疑問を呈するものもある。

Ⅰ　十和田中掫テフラについて

十和田系のテフラ研究については，故大池昭二氏や松山力氏による精力的な研究業績があり，所謂大池編年が今日の基礎をつくり，発掘調査報告書の地形，地質，基本層序などの記載に広く引用されている（図1）。ここでは発掘調査事例からみたTo-Cuの内容や実態について記述するが，先に述べるTo-Cuの考古学年代に関連する研究史は，この大池編年を基軸とされたものである。

1．十和田中掫テフラの考古学年代に関わる研究史

To-Cuの年代について，考古学側からは1980年代に入り言及され始める。その代表的なものとして高橋與右衛門氏と福田友之氏の論考がある。高橋氏は，「東北地方北部の遺跡と火山灰の検討」（高橋ほか，1983）の中で，中掫浮石の降下年代について岩手県二戸市中曽根Ⅱ遺跡例から大木2b式期より新しく，二戸市上里遺跡例から円筒下層d式期より古い時間幅の中に求められる可能性を示唆した。福田氏は，青森県東部～岩手県北部の中掫浮石関係調査遺跡を集成した『考古学からみた「中掫浮石」の降下年代』（福田，1986）の中で，前期初頭と前期末葉の間に位置づけられることを指摘し，併せて円筒下層a・b式及び大木2式と中掫浮石層との関連についてより注意していく必要があることや噴出源に近い地域での資料が不可欠であることを今後の問題点として指摘した。福田氏の指摘後，発掘

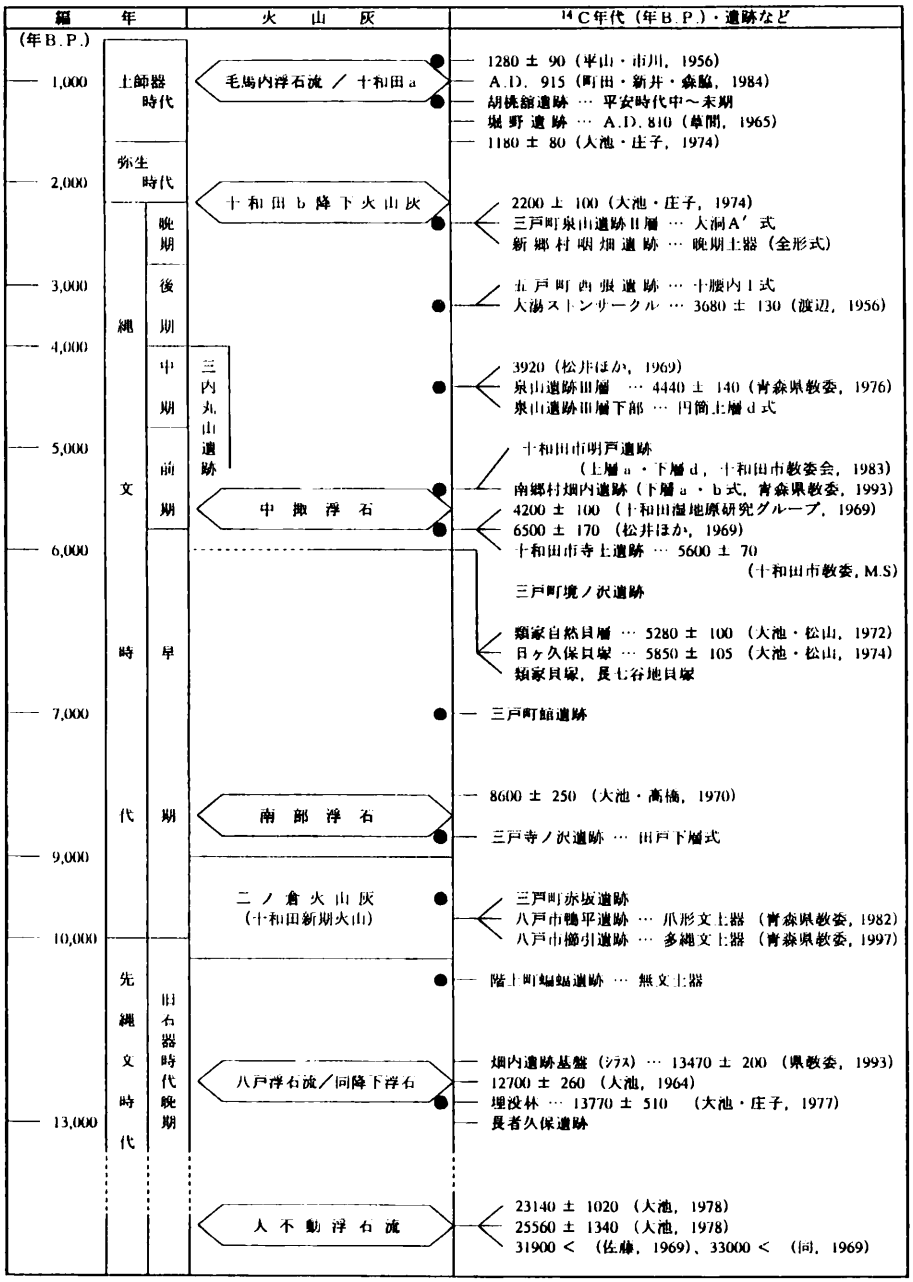


図1　十和田火山の更新世末～完新世火山灰編年（大池・中川（1979），松山（1999）を改変）．

調査でTo-Cu検出遺跡は増加の一途を辿るものの，To-Cuと土器の関係を明らかにできる層位的に良好な資料が得られない状況が続く。

近年，噴出源に近い青森県十和田市寺上（てらかみ）遺跡よりTo-Cu下位で大木2a式（報文中の第VII群土器）と思われる土器の出土が確認され，また青森県南郷村畑内（はたない）遺跡において，To-Cuを直接掘り込んで構築された円筒下層b式期の土器埋設遺構が検出され，さらにはTo-Cu層を掘り込んだ円筒下層a式期の大型住居も検出された（図2）。また，同遺跡B捨場の最下層からは円筒下層a式が出土したが，その包含層直下からは白色の砂質火山灰層が検出され，三辻利一氏による同定分析結果によりその火山灰層がTo-Cuであるとされた（松山ほか，1997）。さらに同遺跡E・F捨場ではTo-Cuの上位からほぼ円筒下層a式単時期の包含層が検出されている（小田川ほか，2002）。

噴出源から遠方の地域に目を向けると，岩手県遠野市綾織新田（あやおりしんでん）遺跡報告書中においてTo-Cuは大木2b式より新しく，大木3式より古いとの見解が示された（佐藤，

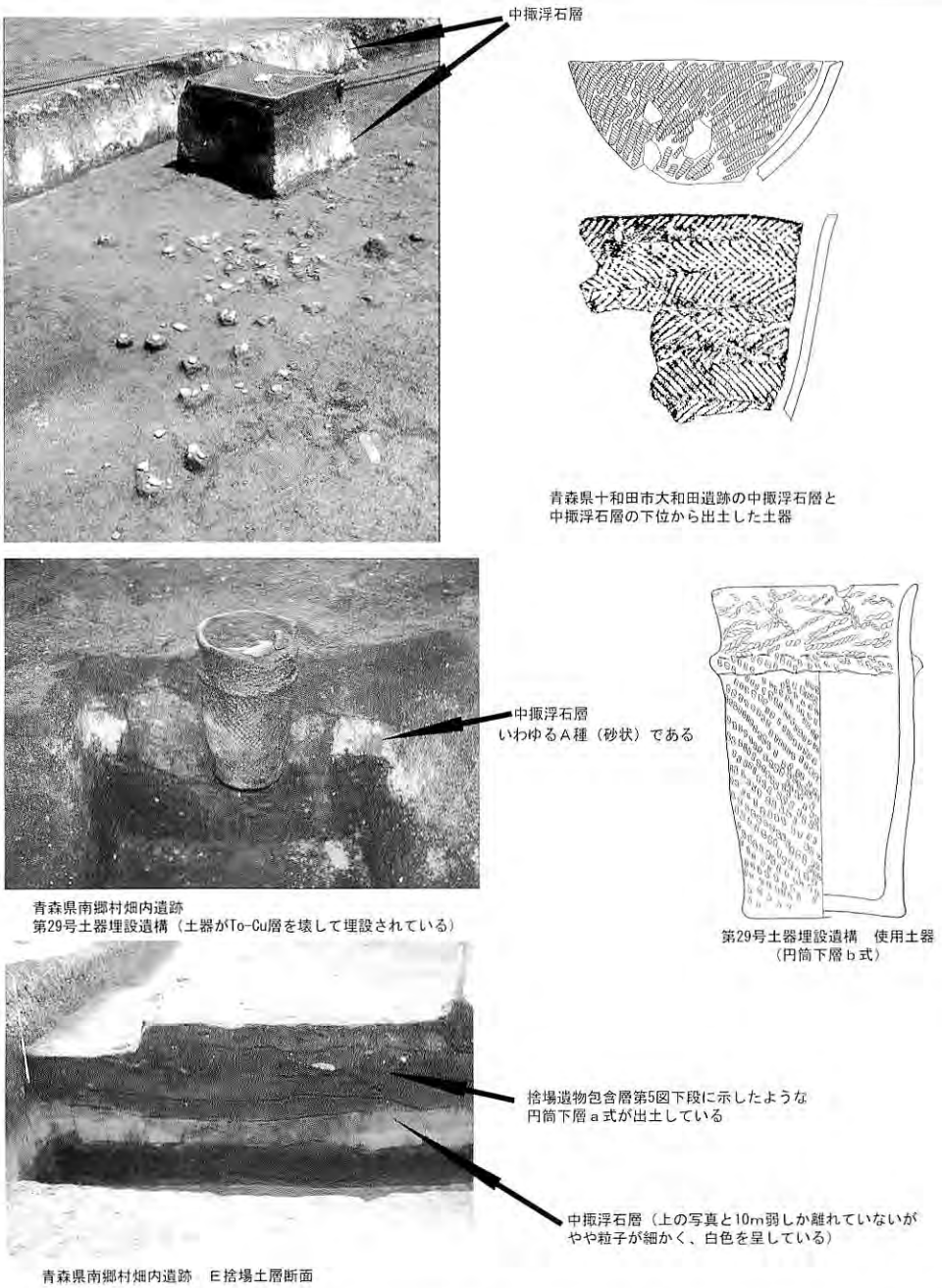


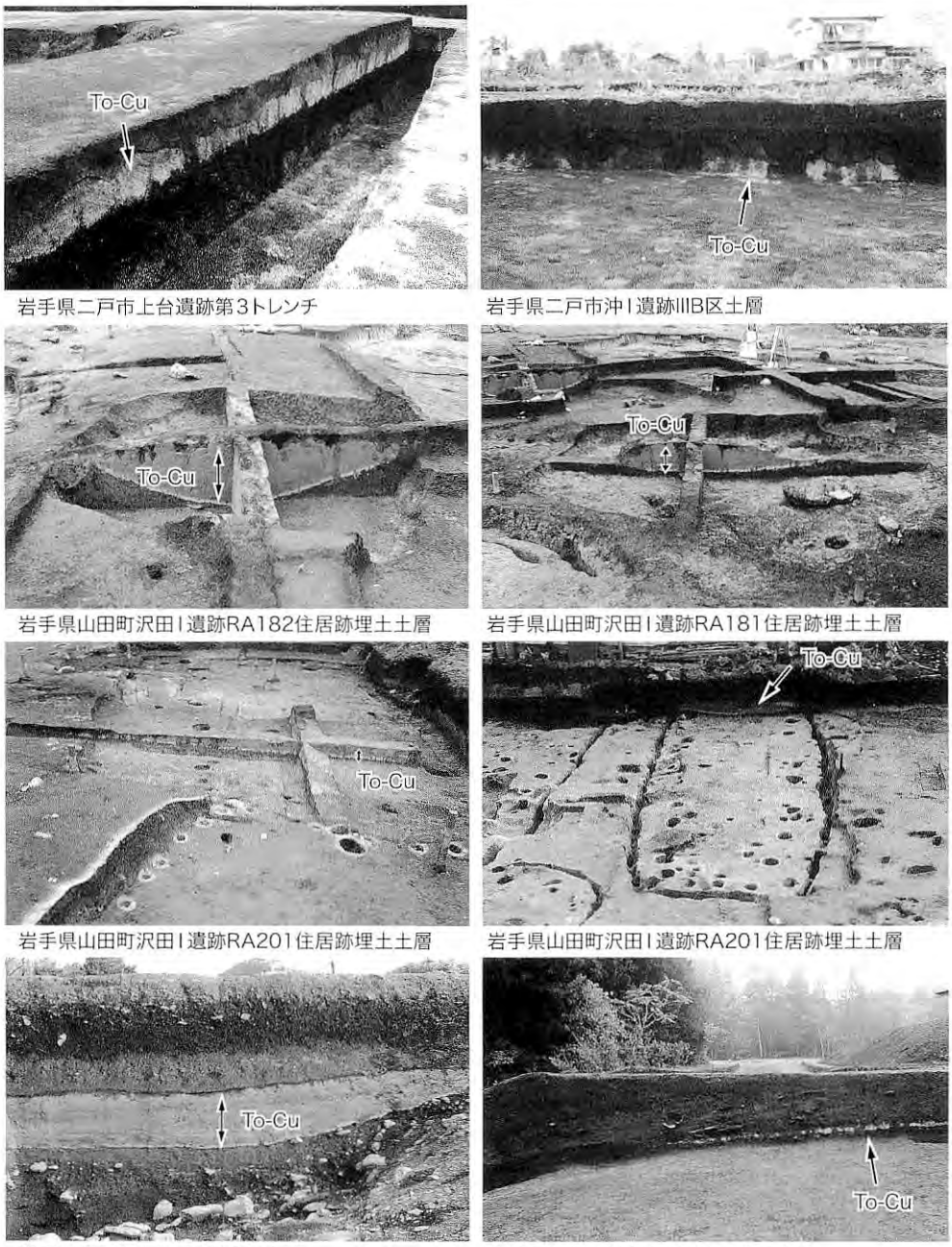
図2　十和田中掫テフラ（To-Cu）と土器の産状（写真提供：青森県埋蔵文化財調査センター）.

2002)。また筆者星は，岩手県山田町沢田（さわだ）I遺跡の発掘調査に従事した際，埋土中にTo-Cuが良好に堆積する住居跡を多数検出する機会があり，それらを考察した際に大木2a式はTo-Cuより古く，また大木2b式についてもTo-Cuより古い可能性を予察したことがある（星，2002)。

最近のTo-Cuの調査事例から，円筒下層a式はTo-Cuの上位，大木2a式はTo-Cuの下位の可能性が極めて高い。今後の最大の課題としては，To-Cuと大木2b式の上下関係解明が挙げられる。

2. 十和田中掫テフラの噴出物と分布の様相

ここでは，発掘調査事例からみたTo-Cuの噴出物や分布などについて，その概要を記述する。図1には所謂大池編年を松山力氏が再改訂した十和田火山の更新世～完新世火山灰編年を掲載した。図4にはTo-Cuの分布と遺跡の位置を示す。十和田火山のテフラは，上位から十和田a



岩手県二戸市上台遺跡第3トレンチ　岩手県二戸市沖I遺跡IIIB区土層

岩手県山田町沢田I遺跡RA182住居跡埋土土層　岩手県山田町沢田I遺跡RA181住居跡埋土土層

岩手県山田町沢田I遺跡RA201住居跡埋土土層　岩手県山田町沢田I遺跡RA201住居跡埋土土層

岩手県住田町小松I遺跡2区土層　岩手県田野畑村和野I遺跡南捨場土層

図3　岩手県内の遺跡における十和田中掫テフラ（To-Cu）の産状.

降下火山灰（To-a：915年と推定されている），十和田b降下火山灰（To-b：弥生時代前半と推定されている），十和田中掫火山灰（To-Cu：約5400年前と推定されている），南部浮石（To-Nb:約8600年前），二ノ倉火山灰（To-Nk:10,000～12,000年前），八戸火山灰（To-H：約13,000年前）が周知されている。その他に南部浮石の上位にのる椛山パミスがあるらしい。

筆者は火山灰の理化学的分析に関しては詳しくないので，ここではあくまで発掘調査時の肉眼観察の体験をもとに，各遺跡の調査報告書から読み取れるTo-Cuの顔付きや分布についてみていくこととする。

1）十和田中掫テフラの噴出物の種類について

To-Cuは，地域によって噴出物に差異がみられる。噴出源からの距離以外に噴火時の風向きや天候などに起因すると考えられる。したがって，発掘調査時の肉眼観察にお

いても，地域によって色調や粒子の様相が異なる。今回は，別稿（星・須原，2004）で示したと同様にTo-Cuを大きくA～Cの3種に分類して表記する。また，それぞれのテフラの顔付きや堆積状況の参考資料として，図2～3に6遺跡の状況写真を掲載した。

A種：色調は黄橙色若しくは褐色などを呈し，粒子は粗い。粒径数cmの軽石や「中振浮石」，「アワズナ」（地元で使われている通称で，名のとおり粟色をした砂状を呈する）と呼ばれる粒径1～数mmの細粒（砂状）軽石までをA種とした。A種は主に噴出源に近い地域でみられる(詳細は不明であるが，岩手県の発掘事例からは概ね60 km圏以内の地域と思われた)。図3には岩手県二戸市上台遺跡と二戸市沖I遺跡例を掲載した。

上台遺跡のTo-Cuは，粒径5 mm程の軽石中心である。対して，沖I遺跡はアワズナと呼ばれる細粒1 mm程の砂状を主体とする。上台遺跡例のほうが，沖I遺跡例より粒径が大きい特徴が看取されるが，ただし，発掘調査報告書で両者を区分したものは少なく，また粒径の大小の違いによる分布域の相違などは明確な区分が難しいため，本稿ではこれらの様相を示すものを，併せてA種として一括した。なお，上台遺跡例のTo-Cuの下位には，黒土を挟在して南部浮石（地元では通称ゴロタと呼ばれている発泡の良い軽石で，To-Cuと較べて粒径が大きく色調は黄味が強い）がみられる。青森県内の事例として図2に十和田市大和田遺跡・南郷村畑内遺跡におけるTo-Cuの産状を示した。2遺跡共にA種であるが，噴出源により近い大和田遺跡では，粒径が2～3 mm程度と大きく，噴出源から約50 kmの位置にある畑内遺跡では，岩手県沖I遺跡例同様砂状の層が見られる。

B種：色調は黄色や肌色などが主体で，砂状あるいは粉末状を中心に粘土化した細粒軽石様も含める。岩手県では従来から「安家火山灰」（菊池ほか，1981）と呼ばれている。A種と比較して噴出源からやや離れた地域で確認されてきたが，最近の発掘調査事例からは噴出源より200 km離れた遠方の地域においても良好な状態でみつかる場合がある。図3には岩手県山田町沢田I遺跡と岩手県住田町小松I遺跡例を掲載した。

沢田I遺跡は，竪穴住居跡の埋土上位～下位に肌色，最下位に黄色を呈するパウダー状（やや粘土化して固い）のテフラがレンズ状に堆積する。層厚は5～50 cmである。小松I遺跡は，斜面堆積と水中堆積の2タイプの堆積様相が把握され，斜面堆積では最大10 cm，水中堆積では最大50 cmの層厚が確認されている。写真は，良好な堆積が観られる調査7区の土層である。To-Cuは3層に区分され，上部は暗灰色～黄褐色粘土質火山灰，中部層は暗灰色～黄褐色火山灰と軽石の互層，下部層は黄褐色～黄橙色軽石(粘土化した粗粒軽石）である。

噴出源からの距離は沢田I遺跡で約140 km，小松I遺跡で約160 km強である。両遺跡のテフラの様相からもわかるとおり，B種としたものの中でも色調，粒子とも異なる顔付きが看取される。

C種：色調は白色で，砂状を呈し，A種ほど粒子は粗くない。青森県青森市小三内遺跡や青森市大矢沢野田（1）遺跡で見られた仮称「小三内火山灰」（辻ほか，1994）や安家火山灰と呼ばれるものの一部が該当する。分布域は明確には把握できていないが，筆者の知る限り青森平野や三陸海岸，北上山地の遺跡で確認されており，基本的にはB種と同様に噴出源から離れた地域で良くみられるようである。また，B種と一緒に見つかる場合と単独で見つかる場合の両者がある。図3には岩手県田野畑村和野I遺跡の捨て場中にみられた白色のテフラ例を示した。なお，筆者の体験で，白色のTo-Cuは，テフラ分析を業者委託した際にTo-Cuではなく別のテフラとの同定結果が得られたことがあり，その同定には注意が必要と思われた。

2）遺跡事例からみた十和田中振テフラの分布について(図4)

To-Cuの分布については，遺跡事例から岩手県を中心にして，青森県についても概略を述べることとする。なお，To-Cuの考古学年代に関する良好な事例については，後述することとするので，ここでは分布のみに視点を置く。

To-Cuは，『新編火山灰アトラス』（町田・新井，2003）に掲載されている分布図にみるとおり，十和田カルデラの南東側の，上記した青森県南東部や岩手県北部で顕著に確認されるが，秋田県では現時点で発掘調査事例からは確認されていない。噴火時の気象状態（特に偏西風）などにも起因するのであろうか。なお，同じ十和田カルデラを噴出源とするTo-aは，秋田県湯沢市堀ノ内遺跡をはじめ，奥羽山脈の西側の遺跡においても確認されている。対して岩手県の三陸沿岸においてTo-aは，久慈市以南の遺跡では確認されていない。詳しくは触れないが，両テフラの分布の差異が，噴火の季節や天候などを推定する手掛かりとなる可能性も考えられよう。

青森県

青森県の発掘調査でTo-Cuが検出された遺跡事例については，今回は時間の都合などにより詳細な集成作業を行えなかった。福田氏の論文には青森県内の31遺跡が記載されているが（福田，1986），その後約20年を経過しているので，相当数の遺跡でTo-Cuが検出されていると思われる。ここでは，青森県を大きく津軽北部（鰺ヶ沢町近辺）と，津軽南部（弘前市・黒石市近辺），青森平野周辺（青森市近辺），下北地方（下北半島），上北地方（三沢市・

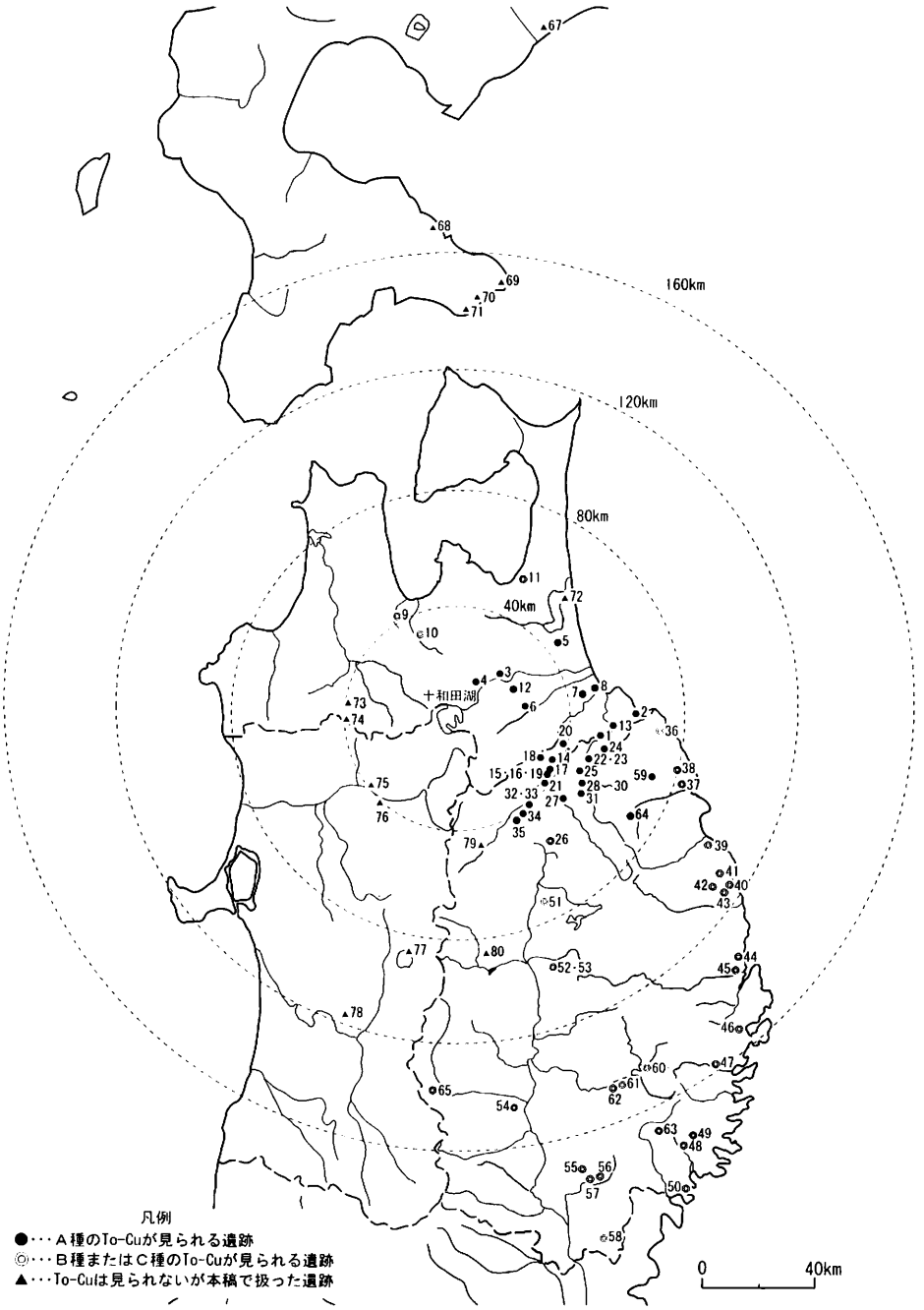


図4　十和田中掫テフラ（To-Cu）の分布と遺跡の位置．遺跡名とその概要は付表1，2に示す．

野辺地町・六ヶ所村近辺），三八地方（十和田湖の南東部，十和田市，十和田湖町，田子町，三戸町・南郷村，新郷村，倉石村（現新五戸町），八戸市，五戸町（現新五戸町）など）の6地域に区分して，To-Cuの分布傾向について記述する。

発掘調査でTo-Cuが確認されているのは，そのほとんどが三八地方に所在する遺跡で，十和田湖東部周辺から，馬淵川流域，新井田川流域，太平洋側南部に渡る地域に相当する。テフラの種類としてはA種としたものが主体である。産状としては，主に沢や谷などの窪んだ地形や遺構内でははっきりとした層を形成するが，平坦な地形においては，黒色土中にぼんやりと層を成す場合や，母材として混入した層が砂質を帯びるといった様子である。比較的良好な層として検出された主な遺跡を挙げると，十和田市寺上遺跡や，十和田湖町中里（2）遺跡，三戸町泉山遺跡，南郷村畑内遺跡，福地村法師岡（3）遺跡，階上町小板橋（2）遺跡，八戸市長七谷地2号遺跡，八戸市和野前山遺跡，

八戸市売場遺跡，五戸町上蛇沢（2）遺跡，下田町向山（6）遺跡，などである。噴出源からの距離は，八戸市で約60 km弱を測る。

その他の地域については，筆者の知る限り，最近青森平野に所在する青森市小三内遺跡と青森市大矢沢野田（1）遺跡で検出された白色のテフラ（仮称小三内火山灰，本稿でC種としたもの）がTo-Cuと同定され，また上北地方の三沢市小山田（2）遺跡で検出されている（三沢市の事例は筆者が探せなかっただけで，他にあると思われる）。そして，野辺地町向田（18）遺跡では円筒下層d1式の包含層下位からC種が，上北町古屋敷貝塚などではA種の可能性があるテフラが確認されている。十和田カルデラからみて，南東方向以外の地域は明らかに飛散が希少であり，偏西風がTo-Cuの分布に大きく影響していることを裏付けるものと捉えられる。

以上，青森県内のTo-Cuの分布傾向について記述してみたが，大雑把な内容であることは否めず，今後に多くの検討課題を提供する。

岩手県

岩手県のTo-Cu検出遺跡事例は，星・須原（2004）が「岩手県内の発掘調査事例からみた十和田中掫テフラ」の中で集成を行ったが，県内154遺跡よりTo-Cuが検出されている。ここでは別稿で示したと同様に，馬渕川流域と，三陸海岸，北上川上流域，北上川中流域，北上山地，奥羽山脈の6地域に区分してTo-Cuの分布や様相について概略を記述する。

馬渕川流域周辺の遺跡は，岩手県内において噴出源の最も近傍に立地し，二戸市や，軽米町，浄法寺町，一戸町，九戸村に所在する遺跡の発掘調査では大半の遺跡でTo-Cuが確認される。これらの市町村は，噴出源から30～60 km圏の地域に相当し，To-Cuの種類は青森県の三八地方と同様にA種がほとんどで，アワズナを中心に若干粒径の大きな浮石がみられる場合がある。遺跡の標高は80～370 mのに集中するが，To-Cuの分布と捉えるより遺跡の分布密度や道路・ダム建設など開発行為に関係した値と思われる。なお，浄法寺町の南側に位置し西側で秋田県と接する安代町は，安比川流域の調査事例が多いにも関わらず，To-Cu検出遺跡を確認できない。このことは，秋田県内でTo-Cuの分布が確認できないことと同様に，噴火時の気象状態や偏西風などに関係する可能性も考えられようか。

三陸海岸の遺跡事例では，北は種市町から南は陸前高田市までほぼ全域からTo-Cuが検出されている。噴出源からの距離は70～200 kmを測る。テフラの種類は，B種とした所謂安家火山灰と呼ばれる黄色や肌色の紛状を主体に，C種とした白色の砂状を呈するもので，A種としたアワズナは確認されていない（久慈市明神遺跡はA種の可能性が残る）。立地については海岸段丘や，山麓斜面地，谷底平野などに多い。遺跡の標高は7～270 mの範囲を観る。堆積状況は層状とブロック状の両方あり，遺構に関わる好資料多い特徴が併せて看取される。

北上川上流域のTo-Cuの検出遺跡は，岩手県内では最も少なく，盛岡市上八木田I，II遺跡と岩手町秋浦II遺跡で見つかっているに留まる（A種もしくはB種）。実態は不明であるが，平野部など低地からは確認されていない。盛岡市は縄文時代の遺跡発掘事例は多いものの，To-Cu降下期前後と思われる縄文時代前期前葉～中葉の発掘調査事例が少ないことがTo-Cuが検出されない要因の一つと考えられる。参考までに記述すると，To-aは相当数の遺跡で確認されている。

北上川中流域では，北上市や，江刺市，水沢市，胆沢町，大東町，一関市，千厩町，藤沢町の遺跡で確認されている。筆者の知る限り北上市と盛岡市の中間地域（矢巾町，紫波町，花巻市など）からはTo-Cu検出遺跡がない。噴出源からの距離は120～200 kmを測る。遺跡の標高値をみると，100 mを超えるものが多く，To-Cuの分布が低地では希少で，標高100 m前後の段丘や台地で確認されるといった特徴が窺える。To-Cuの堆積状況は，ブロック状の堆積が主体で，B種が分布している。

北上山地ではTo-Cuの分布がほぼ全域にみられ，大野村や，葛巻町，岩泉町，玉山村，遠野市，住田町の遺跡から検出されている。噴出源からの距離は70～180 kmを測り，特に遠野市や住田町の遺跡からの検出例が多い。To-Cuの種類は砂状ないし粉末状を呈するB種が多く，また白色を呈するC種を検出する遺跡も少数みられる。To-Cuの堆積状況は，層状とブロック状のどちらもみられる。

奥羽山脈は脊梁山脈ともよばれ岩手県と秋田県の県境の大半を占め，合せて太平洋側水系と日本海側水系との分水嶺をなす。この地域は，湯田町大渡II遺跡例（後期旧石器時代の遺跡，標高260～280 m）だけに留まる。上記したとおり隣県の秋田県の遺跡事例が皆無な状況からも，この地域は元々To-Cuの飛来自体が希薄である可能性が高い。

なお，宮城県内の遺跡からTo-Cuを検出した事例を筆者は知り得ていないが，上記してきた北上山地や，三陸沿岸，北上川中流域の分布様相を鑑みると，宮城県北部地域は今後確認される可能性が高い。

II　調査事例からみた十和田中掫テフラと土器の前後関係

To-Cuの降下に関連して土器が出土した良好な事例を抽出したが，これまでの研究成果から，前期初頭長七谷地III群～前期中葉円筒下層a式期，及び大木1～3式まで

の事例を中心とする。

なお，各遺跡から出土している土器の時期的位置づけや型式などについては，基本的に報告書の記述を優先するが，一部筆者の所見を述べた。記述する土器の時期に誤りがあれば全て筆者の責任である。

1. 十和田中掫テフラ下位の土器

To-Cu 下位の土器については，近年調査事例が増加している。ここでは調査報告書などから筆者が良好な事例と判断した遺跡資料を挙げる。

青森県十和田市寺上遺跡：第IV層がTo-Cu(本稿のA種)層で，その直上の第III層から第VIII群土器（円筒下層期全般，特に以前の調査では円筒下層a式が出土）が，第V層とするTo-Cu直下層から第I群(早期)～VII群土器(前期中葉）が出土している。特筆されるのが，To-Cu下位から出土した第V～VII群土器であり，早稲田6類・大木2a式等にそれぞれ比定できる。中でも大木2a式に比定されるVII群土器は量的にややまとまりがある。該期土器群を考える上で重要な資料と考えられるため，やや詳しく記述する。VII群土器は7～8個体が出土している。全体の器形が復元できるものは2点のみであるが，器形は①円筒形を呈するもの・②胴部にふくらみを持ち口縁部が外反するもの・③胴部にふくらみを持ち口縁部がほぼまっすぐ立ち上がるもののおよそ3種類が見られる。口唇端部は面取りが顕著に行われ，先端部がやや肥厚するものが見られる。波状口縁や突起がつくものが多いが，平縁も見られる。口縁部文様はすべて結節回転文（見かけは不整撚り糸文と葺き瓦状撚り糸文の2種が見られる）であり，胴部文様には3段複節（RLR・LRL）による非結束羽状縄文や単軸絡条体第1類・第1A類がみられる。胎土には繊維が混入している。図6～9などは実測図のみを見れば器形・文様等の点で円筒下層a式と間違えそうであるが，0段が右撚りの縄を原体としている事や，胎土，内面調整等の点で円筒下層a式とは1線を画するものであることを指摘しておく。また，VI群土器はいわゆる深郷田式に類似する資料であるが，永野遺跡前期第4類土器とは器形などの面で異質なものを感じる。しかし0段右寄りの縄を用いている点では類似性が見られる資料である。第V群の中には結節回転文が間隔をあけて多段に施文されている土器がある。胎土や縄文原体の雰囲気は第V群のいわゆる早稲田6類bに類似する。

青森県十和田町中里（2）遺跡：To-Cu（A種）直下層より早稲田6類，表館XV群と称される土器が出土し，円筒下層式土器がTo-Cuの上から出土しているようである。

青森県八戸市和野前山遺跡：To-Cuのばらつきのみられる IV層の直下層より，第8群土器とする早稲田6類土器が出土している。報文中ではこれら第8群土器をA～Eに細分している。第8群土器は基本的には早稲田6類a・bを主体とするが，口縁部に結節回転文を施文するものや，組縄縄文を施文しているものも出土している。報文中では，出土地点の違いからユニットA・Bに時間差があることを指摘しているが，今日的には再検討の余地がある資料である。

青森県八戸市長七谷地2号遺跡：To-Cu（IIIb層）下位のIV層より第3類土器とする大木2a式と推定される土器（結節回転文が全面に施文されている）が出土している。福田氏が論文中で取り上げたことで，To-Cuと大木2a式の関係に一石を投じた事例といえる。

岩手県二戸市沢内B遺跡：To-Cu（A種）下位より前期初頭～前葉に比定される土器群が出土している。これらの土器群は大木1式直前若しくは前後に比定されようか。

岩手県二戸市上里遺跡：北端部遺物包含層において，To-Cu（A種）下位より早期（I群）から前期（II群）の土器が出土している。その内，II群1～4類に分類されたものが前期初頭に，II群5～7類に分類されたものが前期前葉～中葉とされている。To-Cu降下期直前と思われるII群5～7類土器について筆者の所見を述べると，II群5・6類は大木2式相当に，II群7類は大木1式後半に相当する可能性がある。また，II群4類土器は，報告書中では前期初頭に位置づけられているが，武藤氏の編年（武藤，1991）に従えば大木2a式に並行する可能性があり，前期前葉～中葉期の可能性がある。東北地方北部における大木2a式の特定やその並行（併行）関係にある土器を明らかにすることは，To-Cuの年代に関わりが強い問題である。予察的になるが，II群4類土器とII群5・6類土器の時間差を層位的に証明できる資料の出現により，東北地方北部における大木2a式並行期に相当する土器群の存続期間や複雑な様相を示す該期編年の整備に寄与するのではないかと思われた。

岩手県二戸市潰谷地遺跡：To-Cu（A種）下位から早稲田6類相当の土器が出土している。土器の出土量が少なく，また土器型式の特定には問題を残すものの，To-Cuと早稲田6類期土器との関係を掴む良好資料と捉えられる。

岩手県浄法寺町五庵III遺跡：To-Cu下位より早期（I群）から前期初頭(II群1～6類)とする土器群が出土している。前期初頭のII群土器は，報告書中ではII群1類が大木1式及び野口式に，II群2類は春日町式類似に，II群3・5類は円筒下層a式に，II群4類は円筒下層b式に，II群6類は大木2式類似に対比されている。筆者の所見としては，II群1～2類は大木2a式より古手の土器群と判断されるが，II群3～5類を円筒下層a・b式に比定するのには疑問がある。具体的には，円筒下層a式とするII群3類は

大木2a式相当に並行する土器に，そしてII群5類は無文の土器群であり円筒下層a式とは判断できない。円筒下層b式とするII群4類は，波状口縁で結束羽状縄文を施文する特徴から大木2a式に比定される可能性が高く，II群6類は大木2a～2b式の範疇で捉えられる。よって，相対的に大木2a～2b式がTo-Cuより古いと捉えられる事例と判断する。

岩手県浄法寺町飛鳥台地I遺跡：竪穴住居跡資料と遺物包含層の関係からTo-Cu下位より早稲田6類相当，To-Cu上位で円筒下層d1式が出土している。

岩手県宮古市崎山貝塚：包含層のTo-Cu（安家火山灰）下位よりI群土器（大木1式相当）が出土している（高橋ほか，1995）。崎山貝塚は，国史跡指定に関わりその後も確認調査が実施されており，今後の調査成果によりTo-Cu前後の土器編年に寄与することが期待される。

岩手県山田町沢田I遺跡：前期住居跡が約80棟検出されており，その中で21棟の竪穴住居跡の埋土からTo-Cu（B種）がレンズ状や，層状，ブロック状に堆積しているのが見受けられた。前期住居跡は，大木1式～大木2b式の時間幅で捉えられると思われ，筆者の考察では大木2a式がTo-Cuより古く，大木2b式についてもその可能性が極めて高いと思われた。追記として，出土土器全般を観ると，縄文前期においては大木I式以前と考えられる土器は少量であり，大木1～2b式が主体で，大木3式と判断される土器はない。また，大木4～5式は少量確認されているにとどまる。（大木4・5式期の住居跡は認知されていない）。この遺跡は縄文時代早期～中期，弥生時代，奈良・平安時代の複合集落遺跡であるが，To-Cu降下後から中期中葉の大木8a式までは集落としては衰退したものと捉えられる。

岩手県大東町奈良崎II遺跡：竪穴住居跡でTo-Cu下位より前期土器（大木I～2式相当と推定）が出土している。竪穴住居跡からの出土土器量は貧弱であるが，埋土中におけるTo-Cuの堆積状況は良好であり，出土土器はTo-Cu降下期を反映しているものと判断される。

岩手県遠野市権現前遺跡：竪穴住居跡でTo-Cu（B種）が混在する埋土中より大木2a式が出土している。調査報告者はTo-Cuより古いと捉えているが，客観的にみて報告書に載る土層断面図などからTo-Cuと出土土器の新旧関係を判断するのは難しいように思われた。また，報告書中には大木2b式に該当するS字状連鎖沈文を施した土器がまったく見られなかったとの記述があり，To-Cuと大木2式期集落の関係を研究する上で，好資料と判断される。

岩手県住田町小松I遺跡：遺跡内ではTo-Cu（B種）が斜面堆積と水中堆積の2タイプの堆積が確認され，併せてTo-Cuと土器の出土層位を明確に捉えた事例として評価される。住居跡のTo-Cu下位より早期後葉～前期初頭の土器が出土している。また，調査2区よりTo-Cu下位のIVa2層からIX群土器する大木2式相当が出土している。併せて大木式に先行する土器群で，当該地域において早期末葉～前期初頭に位置づけられている上川名2式相当の土器群が，IVa3～V層で出土している（吉田，2004）。この事例についても沢田I遺跡や権現前遺跡などと同様に，大木3式など大木2式以降の土器は確認されていない。

2. 十和田中掫テフラ上位の土器

ここではTo-Cu上位で捉えられた円筒下層a～b式と大木2～3式前後の事例を抽出した。To-Cu下位で土器が出土した事例に較べて，To-Cu上位で土器が出土した事例は少なく，その判断も困難な資料が多い。

青森県階上町小板橋（2）遺跡：To-Cu（IV層）の上位であるIII層から円筒下層式が出土しているようである。また，この遺跡事例はTo-Cu下位において，早期の土器はある程度の出土量があるものの，円筒下層式は皆無である。また，報文中では表館式～円筒下層a式とされている土器群は，報告書の遺物図版を見る限り前期初頭と円筒下層b～d式にそれぞれ相当すると思われた。

青森県南郷村畑内遺跡：E捨て場のVIII層が水性堆積によるTo-Cu層で，その上位に載るVIIa層とする遺物包含層よりA群土器（このE捨て場では円筒下層a～b式が主体）が多量に出土している。併せて，大木2～4式に相当する異系統土器が若干量出土している。また，IXa層とする南部浮石の混入するVIII層（To-Cu）下位の土層より，早稲田6類相当の土器が出土している。この遺跡事例は，円筒下層a式（新段階か？）とTo-Cuの層位関係を捉えた数少ない良好な資料であり，円筒下層a～b式に併行する大木系土器（いわゆる白座式は出土していない）が出土している点も注目される。そして，早稲田6類相当の土器群がTo-Cu下位で相違ないことも併せて立証している。

青森県五戸町上蛇沢（1）遺跡：To-Cuの混入するIII層より円筒下層a式が出土している。このIII層は下方ほどTo-Cu由来の浮石砂が密に混入する。隣接する上蛇沢（2）遺跡からは，IIIC層とするTo-Cu層の上層であるII層から円筒下層a・b・d式が，中期・後期の土器と混在して出土している。

岩手県軽米町大日向II遺跡：第6次～第8次調査報告書（高木，1998）において，円筒下層a～b式期の住居跡が多数報告されている。それらの中で，QIV12住居跡や，OIV07住居跡，PIV11住居跡などで，To-Cu（A種）が混在する埋土より該期の土器が出土しており，報告者の高木晃氏よりTo-Cuより新しい段階と捉えられることを御教示いただいた。QIV12住居跡からは円筒下層a式が，OIV07住居跡・PIV11住居跡からはそれらと併行関係に

なる可能性が極めて高い大木系土器が出土している。なお，OIV07住居跡，PIV11住居跡出土の大木系土器について，筆者の所見としては所謂白座式と大木2～3式の共伴例とも受け取れる。そしてこれらの土器には組紐回転を施文するものが一定量含まれる。この遺跡事例は，To-Cuと円筒下層a式の新旧関係を捉えただけでなく，円筒下層a式と大木式の併行関係を考える上でも貴重な資料と考えられる。

岩手県一戸町上野（うわの）B遺跡：To-Cu層（III層）及びその上位のII層より円筒下層a式が出土しており，To-Cuより円筒下層a式が新しいと判断される。ただし，BH03土壙は，その埋土上位にTo-Cuがレンズ状に堆積し，その下位の黒褐色土中から前期土器が出土した旨の記述があるものの，その前期土器は報告書に掲載されていないため，円筒下層a式なのか若しくはそれより古手の土器なのか窺い知れなかった。

岩手県和野（わの）I遺跡：南捨て場でTo-Cu（C種）上位のI～3e層から前期後葉～中期前葉を中心とする土器が多量に出土している。To-Cu直上の3e層出土土器を概観すると，文様が地文のみの粗製土器が目立つ。文様からある程度時期が判断できる土器としては，円筒下層d式を中心に円筒下層a～b式，白座式などがある。前期大木式と認識できるものは見当たらない（3e層より上位の3b・3c層出土の中には大木5式が含まれるが，3e層及び3d層は粗製土器が圧倒的に多い）。特徴的に見られるものとしては，丸組紐と思われる原体を施文する土器が一定量含まれる。

3. 十和田中掫テフラ上下の土器

ここでは，To-Cuの上下層で土器が出土した調査事例や，To-Cuとの層位的上下関係が明確には掴めないものの出土土器の時期に連続性が認められる事例などを抽出する。ここで記述する事例は，To-Cuの下位か上位の，若しくはTo-Cuを跨ぐ重要な資料で，概ね大木2b式期の出土事例を中心とした。

岩手県二戸市中曽根（なかそね）II遺跡：To-Cuは竪穴住居跡8棟の埋土上位～中位に層状およびレンズ状に堆積が確認されている。その中で150号址よりTo-Cu下位で大木2b式（報告書でのIV群土器）が出土し，155号址よりTo-Cu上位で大木2b式が出土している。この2棟の竪穴住居跡の土器出土状況を相対的に捉えると，To-Cuの上下で大木2b式が出土する可能性が窺える。ただし，他の6棟からは明確に大木2b式が出土したものはなく，また155号址の断面図などを見る限り埋土上位にかなりの攪乱がみられる。そしてTo-Cuを截る該期の遺構も検出されていない。これらの出土状況からこの事例について所見を述べると，大木2b式はTo-Cuの下位の可能性はあるものの，上位で出土することには否定的に思われる。

岩手県山形村早坂平（はやさかたい）遺跡：To-Cu（B種）を埋土に含む竪穴住居跡が4棟確認されており，出土土器は大木1式を主体とする。また，To-Cuが埋土上位～中位に混じり，埋土下位にTo-Nbが混じる陥し穴も検出されている（To-Cuよりは確実に古い陥し穴例と思われる）。出土土器はI群～VII群に分類されているが，その中でTo-Cuと関わりを持つのが，II群土器（長七谷地III群，表館式相当）とIII群土器（大木1～3式）である。そして，III群土器はA～Q類に分類されており，それらの出土層位はIII～IIIc層として分層され，IIIb層とするTo-Cu混入層とその上位であるIII層・IIIa層，To-Cu下位のIIIc層からの出土となる（一部III層より上位のII層とIIIc層下位のIV層系から出土した土器も含まれる）。報文中には，「この包含層の形成には人為的な堆積だけではなく，降雨などによる遺物の移動及び土層の二次堆積などが介在する可能性が否定できない」との報告者の見解がある（北村，2004）。よって，To-Cuが本来の層序を保っているものか疑問視される部分もあるが，出土土器の時期に連続性を感じるので，今後検討を試みたい。

岩手県釜石市沢田（さわだ）2遺跡：包含層のTo-Cu（B種）の上下で上川名2式～前期大木式全般が出土している。報告者の所見としては，大木2式がTo-Cuの下で，大木3式がTo-Cuの上で出土する傾向が窺える（鳥居，2002）。この遺跡は前期大木式全般が出土している岩手県内でも稀な事例である。ただし，地形的な環境に起因して，遺跡内でTo-Cu自体がかなり動いている様相ではあり，層位的には良好な資料とはいい難く参考資料の評価にとどまろう。

岩手県藤沢町上野平（うわのたいら）遺跡：包含層の中で，細分層位で取り上げたD区・E区はTo-Cu（B種）と大木式土器の関係を示す良好な資料と判断される。以下に概観すると，D区はTo-Cu直上層より大木2b式相当と大木4式が，To-Cu層～To-Cu直下層で大木2b式相当及び大木1式が出土している。E区はTo-Cu直上層より大木2b式相当と大木4式が，To-Cu層で大木2b式相当が，To-Cu直下層で大木2b式相当及び大木1・2a式相当が出土している。以上の状況から，強く言えるものではないが，To-Cuの上と下で大木2b式の新段階（若しくは大木3式？）と旧段階に分かれる可能性を匂わせる資料なのかもしれない。

岩手県遠野市綾織新田（あやおりしんでん）遺跡（新田II遺跡）：遺跡は縄文時代前期中葉～後葉の集落跡で，大型住居跡が環状に配される。To-Cuは住居跡8棟と，小竪穴遺構3棟，土坑6基，また道路状遺構の検出面から検出している。いずれの遺構でも埋土中においてTo-Cu（B種）がブロック状に混入する。報告書によると，埋土にTo-Cuが混入する遺構としない住居跡とに分けられ，To-Cuの混入する住居跡からは大木2a・2b式が，混入しない住居跡からは大木3・4式の土器

が出土したとある。上記のことから相対的に捉えて，大木2b式がTo-Cuより古く，大木3式がTo-Cuより新しいと考察されている（佐藤，2002；調査時の遺跡名称は新田II遺跡とされていたが，現在の遺跡名称は綾織新田遺跡に変更されているため，本稿ではそれに従う）。併せてTo-Cuの降下以降についても継続した集落資料としても，貴重な事例といえよう。

岩手県北上市南部工業団地遺跡：To-Cuについては，報告書中の基本土層での記載はないもののC007竪穴住居跡の図や写真において，埋土上～中位にTo-Cu（B種）と推定される火山灰の層状の堆積がみられる。この層上面より，報告書でのIII群1種（大木2式相当，大木3式混在？）に分類された土器が出土している。また，To-Cuが確認されていない包含層出土に前期前葉～中葉の良好な資料が多い。

4．小結

To-Cu下位の遺跡事例は，比較的類例が増えている。その中で早稲田6類相当の土器は，1節で取り上げた遺跡事例以外に青森県南郷村三合山遺跡や，南郷村外長根（4）遺跡，八戸市長者森遺跡，八戸市楢館遺跡などにおいて，To-Cu下位から出土している。また，上記した武藤編年に従って（武藤第3類が深郷田式相当），円筒下層a式の直前型式と考えられている深郷田式がTo-Cuと絡む事例をみてみると，上里遺跡や五庵III遺跡出土土器はTo-Cuの下位である。ただし，青森県の深郷田式の出土事例をみると，津軽地方を中心とした日本海側が主体であり，To-Cuが主に分布する地域からは出土をみないことから，To-Cuに関連する事例は非常に希少である。深郷田式についてはIII章で後述する。

上記でみてきたTo-Cuとの層位的事例を総括すると，層位的に確実と断言できる事例は希少という現状である。実際の野外調査時において，To-Cuが一次堆積なのか二次堆積なのかを同定するのは容易なことではなく，また二次堆積の場合であっても降下時期を反映している状態なのかどうか判断に苦慮する場合が多いと捉えられる。必然的に調査報告書から，To-Cuが降下時期を反映している状態なのか，後世の再堆積の疑いがないかどうかを読み取ることは困難となる。特に噴出源から比較的近い地域に分布する本稿でA種としたものは，砂状であるため，黒土に混じりやすく，流されやすい性質のため，よほどの好条件にめぐまれなければ純層の状態を保つことは難しい。またTo-Cuが良好な状態であっても土器の出土量が貧弱な事例も多々みられる。ここで取り上げた事例については，調査報告書より出土土器がTo-Cuの降下時期を反映している可能性の高いと判断したものである。

III　To-Cuに絡む土器群の型式学的特徴について

前章では，発掘調査事例から読みとれるTo-Cuと土器型式の関係について概観した。その結果，①長七谷地III群，表館式，大木1式，大木2a式，早稲田6類土器は確実にTo-Cuの下位から出土すること，②円筒下層a式はTo-Cu下位での出土例が現時点で皆無であること，③大木3式がTo-Cuより上位で出土する可能性があること，という3つの事実が得られた。また，いわゆる深郷田式と，白座式，大木2b式などについては，To-Cuとの明瞭な上下関係を現時点では掴みきれないという事実も判明した。

本章では，前章までに扱った遺跡出土資料や従来の編年観を踏まえつつTo-Cu上下の土器群について，現時点で筆者が理解している型式学的な特徴を整理し，これらの土器群を考える上での問題点を提起したい。

1．To-Cu下位の土器群について

先述の通り，To-Cu下位からは，表館式や，早稲田6類土器，大木1～2a式土器などが出土する。以下にそれらの型式学的特徴を列記する。

表館式（図5：1–6）

表館式は六ヶ所村表館遺跡出土土器を標識として佐藤達夫氏により設定された型式である。To-Cuとの層位的関係を持った出土事例として，大矢沢野田（1）遺跡の例をあげた。

器形：底径が小さく，底面がやや丸みを帯びる平底深鉢を基本とする。底部から口縁部までややふくらみを帯びながら立ち上がる器形（1, 2）と明確な頸部の括れを持つ器形（3–6）の2者があり，後者の口縁部は外傾するもの（5）と受け口状に弱く内湾するもの（3, 4, 6）がある。底面には連続刺突文が同心円状に施文される例が多い。

口縁部形状：平縁が基本であるが，僅かに波状縁も見られる。

口唇端部：端部は面取りや磨きが施され，内削ぎ状になるものや四角張るものがある。端部上面への施文は基本的にない。

口頸部文様帯：（半裁）竹管や爪？状工具による連続刺突文や重層末端ループ文等による明確な口縁部文様帯を形成するものとしないものがある。文様帯内は，平行基調の単純な文様構成のみのものと，三角繋ぎその他の幾何学的な文様を構成するものの2者がある。

胴部文様：末端ループ文（0段多条，粗い物と細かいもの有り）や連続刺突文が単純に重層するものが多いが，口縁部文様帯と同様に幾何学的な文様を構成するものもある。また，コンパス文がアクセント的に用いられる例も少なくない。

胎土：繊維を多量に含んでいる。

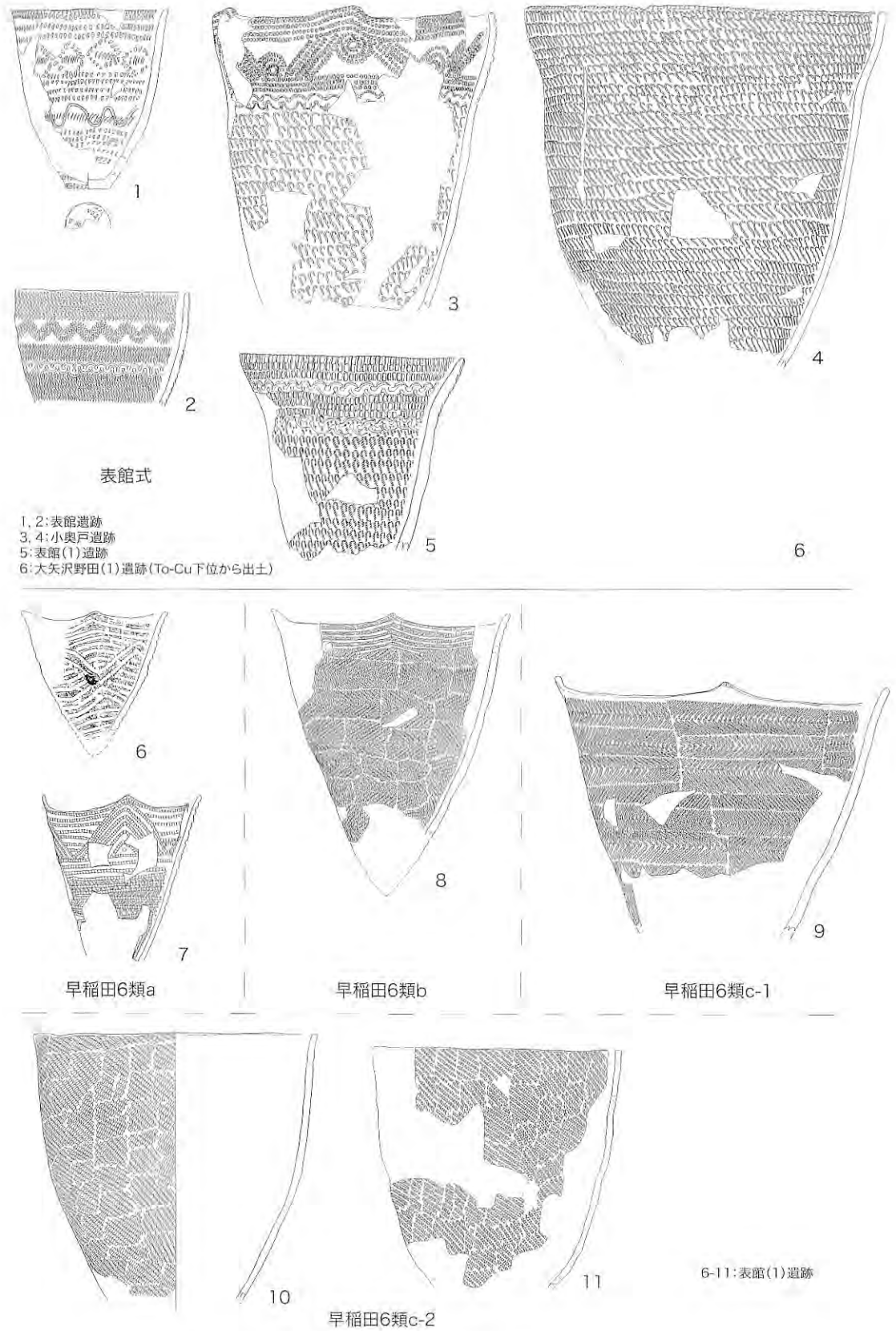


図5　表館式・早稲田6類土器.

分布：東北地方北部日本海側にやや多く出土する傾向がある。また，北海道南西部（渡島半島付近）においても類似した土器の出土が見られる。本型式は東北南部（福島県や山形県で見られる）の大木1式との類似性が強い土器群である。

早稲田6類土器（図5：6–11）

三沢市早稲田貝塚第5層出土土器を基準に佐藤達夫氏が設定したもので，a・b・cの3種に分類されている。

早稲田6類a（図5：6, 7）

器形：胴部に若干のふくらみを持つ尖底深鉢が基本形である。底部は鋭角に尖るものが多いが，丸みを帯び乳房状に尖るものも少量ある。

口縁部形状：波状口縁（4単位）を基本とする。

口唇端部：端部は丸みを帯び磨かれるものが多い。端部への施文は基本的に見られない。

文様：ほぼ全面に竹管状工具を用いた押引沈線文（類竹管文）及び同様の工具を用いた沈線文による幾何学的な文様が構成される。

胎土：繊維を多量に含む。

早稲田6類b（図5：8）

器形：6類aと同様である。

口縁部形状：波状口縁（4単位）を基本とする。

口唇端部：端部は丸みを帯び磨かれるものが多い。端部への施文はない。

文様：口縁部と底部付近に押引沈線文と沈線文による幾何学的な文様が構成される。

胎土：繊維を多量に含む。

早稲田6類c（図5：9–11，※は筆者の分類）

器形：6類a・bと同様なもの（9）（c-1※），丸底あるいは乳房状尖底を持ち全体に重心が下がり気味な器形を持つもの（10, 11）（c-2※）の2者に分類される。

口縁部形状：c-1は波状口縁（4単位）を基本とし，6類a・bの粗製タイプと捉えられる。c-2は平縁を基本とする。

口唇端部：c-1の端部は丸みを帯び磨かれる例が多い。端部への施文はない。c-2の端部は四角張る例が多い。端部への施文は基本的にないが，c-2の一部には端部上面に指頭等による刻みや縄文が施文されることがある。

文様：明確な口縁部文様帯を形成するものはほとんど無い。c-1には結束第1種羽状縄文と末端ループ文（共に0段多条）が重層施文される。c-2には斜縄文（2段・3段の縄）や，組縄縄文（高橋，1989），結束第1種羽状縄文（0段多条），結節等が施文される。

胎土：繊維を多量に含む。

このように早稲田6類は6類a・b・cに分類されるが，6類cについては，その内容にかなりの幅があるのは従来指摘されているとおりである（小田川，2002等）。c-1については，6類a・bに伴う粗製深鉢と捉えられるが，c-2は6類aに前後する違う型式を含んでいる可能性が高い。また，c-2の分布は青森県南東部～岩手県北部地域にまとまるようであり，地域的に限定された型式である可能性がある。

大木1式（図6：1–5）

大木式の各型式は山内清男により設定されたが，特に前期大木式の前半部分に関しては，設定の根拠となった土器の写真や図が最近まで（中村編, 1996）明らかにされなかったこともありその後の研究に混乱を来たしている。図には宮城県名取市今熊野遺跡出土土器を示した。現在の標識的な資料と考えられる。

器形：平底深鉢を基本とする。底部から口縁部までほぼ直線的に立ち上がる器形（4）と胴部付近でややふくらみを持つ器形（1, 2, 3, 5）の2者があり，後者の口縁部は外反するもの（2）と受け口状に弱く内湾するもの（1, 3）がある。

口縁部形状：平縁と波状の両者がある。波状の場合波頂部が尖り気味なものと丸みを帯びるものがある。

口唇端部：端部の面取りは顕著ではない。端部断面は丸みを帯びるものが多い。端部への施文は基本的に見られない。

口頸部文様帯：明確な口縁部文様帯を持つものでは，末端ループ文の多段施文が目立つ。

胴部文様：末端ループ文（0段多条，粗い物と細かい物有り）や異原体による非結束羽状縄文（2段・3段（0段多条））が多い。結束第1種羽状縄文や結節回転文（いわゆる葺瓦状撚糸文・不整撚糸文）もごく僅かに存在する。これらの原体が横位に回転施文され，ほぼ等間隔の横帯が多段に形成されるのも特徴の一つである。

胎土：繊維を多量に含んでいる。

以上の特徴で説明できる大木1式は，仙台湾周辺の資料を基に設定され，裏付けられたものであるが，福島・山形両県に分布する大木1式と考えられる資料は，口縁部文様帯に表館式に類似した連続刺突文やコンパス文などが施文されるなど，仙台湾周辺地域と若干様相が異なる。今後地域差・時間差の問題とTo-Cuとの層位的関係を鍵に編年体系を再構築する必要がある。

大木2a式（図6：6–13）

大木2式は，大木1式同様設定の根拠となった資料が明確ではなく，東北北部地方においては，近年まで良好資料に恵まれなかったが，最近類例の増加が進んでいる。図6には十和田市寺上遺跡と北上市南部工業団地内遺跡出土土

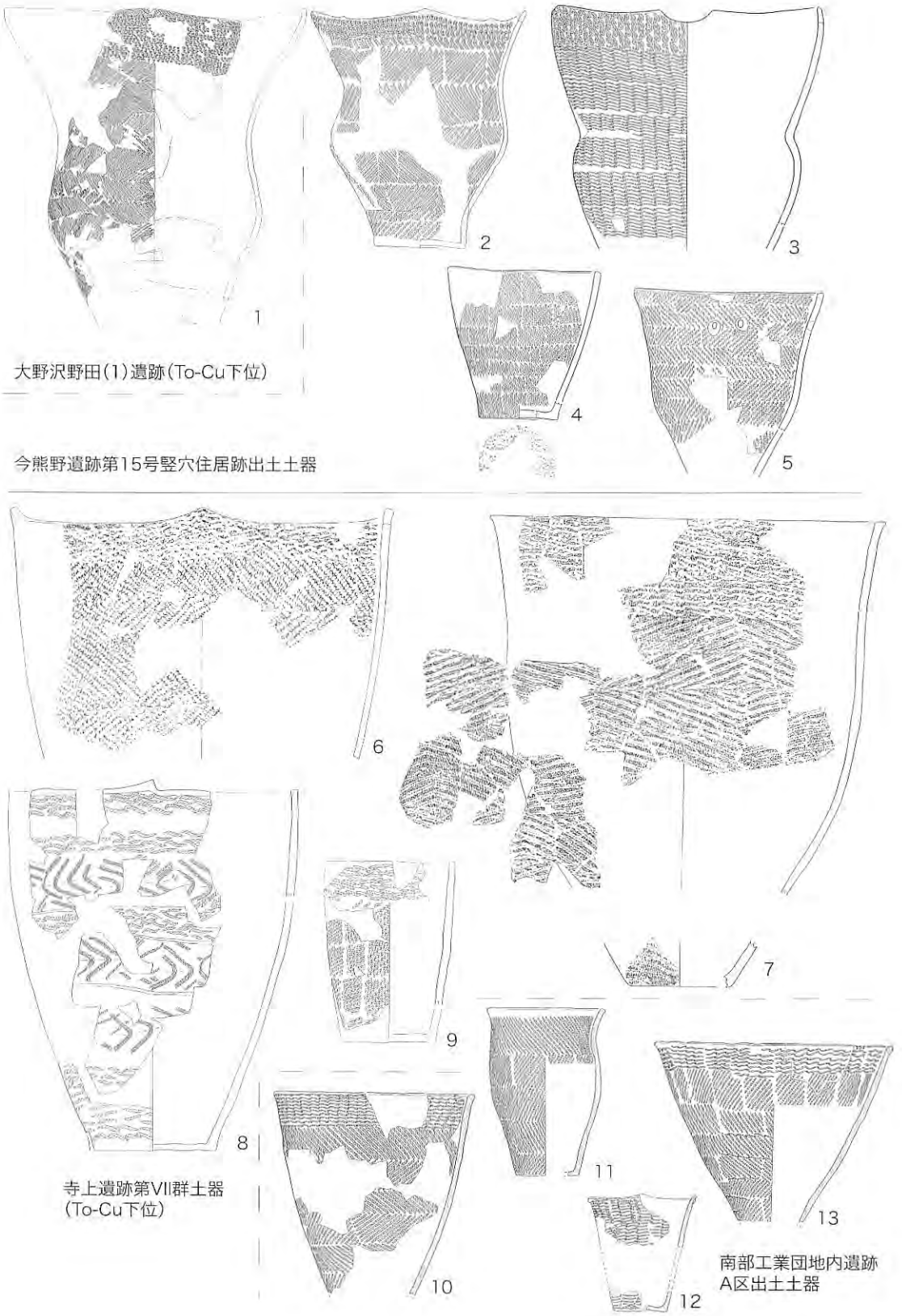


図6　大木1式・大木2a式土器.

器を示した。

器形：平底深鉢を基本とする。底部から口縁部までほぼ直線的に立ち上がる器形（9, 12, 13）と胴部付近でややふくらみを持つ器形（6–8, 10, 11）の大きく2者がある。後者には，口縁部付近が外反するもの（7, 11）も見られる。

口縁部形状：平縁と波状の両者がある。波状の場合，4単位または2単位の波状口縁がある。また，図示しなかったが波頂部が2個一対の突起状になるものもある。

口唇端部：端部の面取りは顕著で，上端は丁寧に磨かれる物が多い。端部断面は外側に肥厚し，角張るものが特徴的である。端部への施文は基本的に見られない。

口頸部文様帯：横位展開の結節回転文（いわゆる葺瓦状撚糸文・不整撚糸文），半裁竹環状工具による沈線文（平行・鋸歯状）などが施文される。明確な文様帯を持たないものもある。

胴部文様：非結束羽状縄文・斜縄文（2段・3段（0段多条が多い））や，結束第1種羽状縄文，単軸絡条体第1・1A・5類，結節回転文などが見られる。施文方向は横位であり，段状に施文され横帯を形成することが多い。

胎土：繊維を多量に含んでいる。

大木2a式とみられる資料は，近年岩手県下で資料が急増中である。図示した資料は，口縁部に結節回転文が施文されることから大木2a式に比定されるものであるが，胴部文様を見る限りでは大木1式との類似性が強く，1式と2a式の境界に位置づけられる資料であると考えられる。今後，現行の仙台湾編年を周辺地域の資料と比較検証することで，大木1・2式の変遷過程と内容を再吟味する必要がある。その際仙台湾以南の地域（福島県や関東地方）で出土する大木2a式との地域性の有無も重要な視点となりうる。

2．To-Cu上位の土器群

ここでは，円筒下層a式と大木3～4式の型式学的特徴について列記する。

円筒下層（えんとうかそう）a式（図7）

円筒下層a式は長谷部言人により命名された円筒土器について，山内清男が青森県市浦村オセドウ貝塚や同県八戸市是川一王寺貝塚出土土器における分層発掘資料を基に下層式と上層式を設定しさらに個々を細分し設定されたものである。しかし，設定の基準となった一王寺貝塚の資料内容が不明であったことや，石神遺跡など青森県津軽地方の土器を基に円筒土器の編年を行った江坂輝彌氏や村越潔氏らの編年観と微妙な違いが生じたため，最近に至るまで型式認定に齟齬が生じていたことは事実である。そのような中で1996年に発刊された『画竜点睛』（中村，1996）中において，一王寺貝塚出土資料の写真図版が型式名を添えて紹介された。

器形：口径と底径の差が大きい（2：1～1.5程度），いわゆるバケツ形の器形が基本であり，胴部に膨らみを持つもの，口縁部が外反するものなどもある。底部は平底であり，底部外面が平坦なものや，やや上げ底気味なものなどがある。

口縁形状：平縁を基本とするが，波状も相当数ある。波状口縁の場合2単位が多く，波頂部は山形・二股状の他に各種突起があり，多様である。

口唇端部：断面形は丸みを帯びるものが基本で，ミガキなどは顕著ではない。端部には縄文や，刺突，沈線などが施文されるため四角張るものも多い。

口縁部文様：口縁部文様帯には結節回転文が施文されるものが多く，その他に斜縄文や，沈線，縄文原体の側面圧痕その他がある。

区画帯：口縁部と胴部文様帯の区画には隆帯が使用されるものがある。隆帯は幅約1 cm程度のものが多く，最大2 cm近いものまで存在する。胴部器面から肥厚するものが多く，断面形は四角や蒲鉾形等がある。隆帯上面には沈線や，刺突，縄文原体の側面圧痕，指頭押圧等が施文される。区画を持つものは全体の1～2割程度である。

胴部文様：斜縄文（LR・RLR）を基本とし，直前段反撚り，単軸絡条体1・1A・2・4・5類も少量存在する。縄文原体の0段の撚り方向は左撚りが圧倒的に多い。また，0段多条の原体も僅かに存在する。

胎土：繊維を含むが，下層b～d式のように大量に含むものは希で，全体的に含有量は少ない。

円筒下層a式は概ね以上のような特徴を持つが，これらの特徴は円筒下層a式の分布する全ての地域に共通するものではなく，地域によりその組み合わせに差がある事がわかっている（三宅，1974；茅野，2002など）。

大木（だいぎ）3式（図8：1–8）

図には牧田貝塚出土第II群土器を示した。現状では遠野市綾織新田遺跡と並んで良好な発掘資料と考えられるが，大木3式の実態は未だ不明な点が多い。

器形：胴部中位に膨らみを持ち口縁部が外反する器形（1, 7）や，口縁部がラッパ状に外反する器形（2, 8），バケツ形や円筒形に近い器形（3, 4）で構成されるようである。底部は平底であり，外面は平坦なものが多いようである。

口縁形状：平縁を基本とする。

口唇端部：断面形はやや丸みを帯び四角張るものが多い。端面は磨かれる。端部には基本的に施文されない。

口縁部文様：口縁部文様帯は無文帯が形成されるものが多い。無文帯とそれ以下は沈線や刻み付の細隆線などで区画されるものが多いが，区画のないものもある。沈線の中

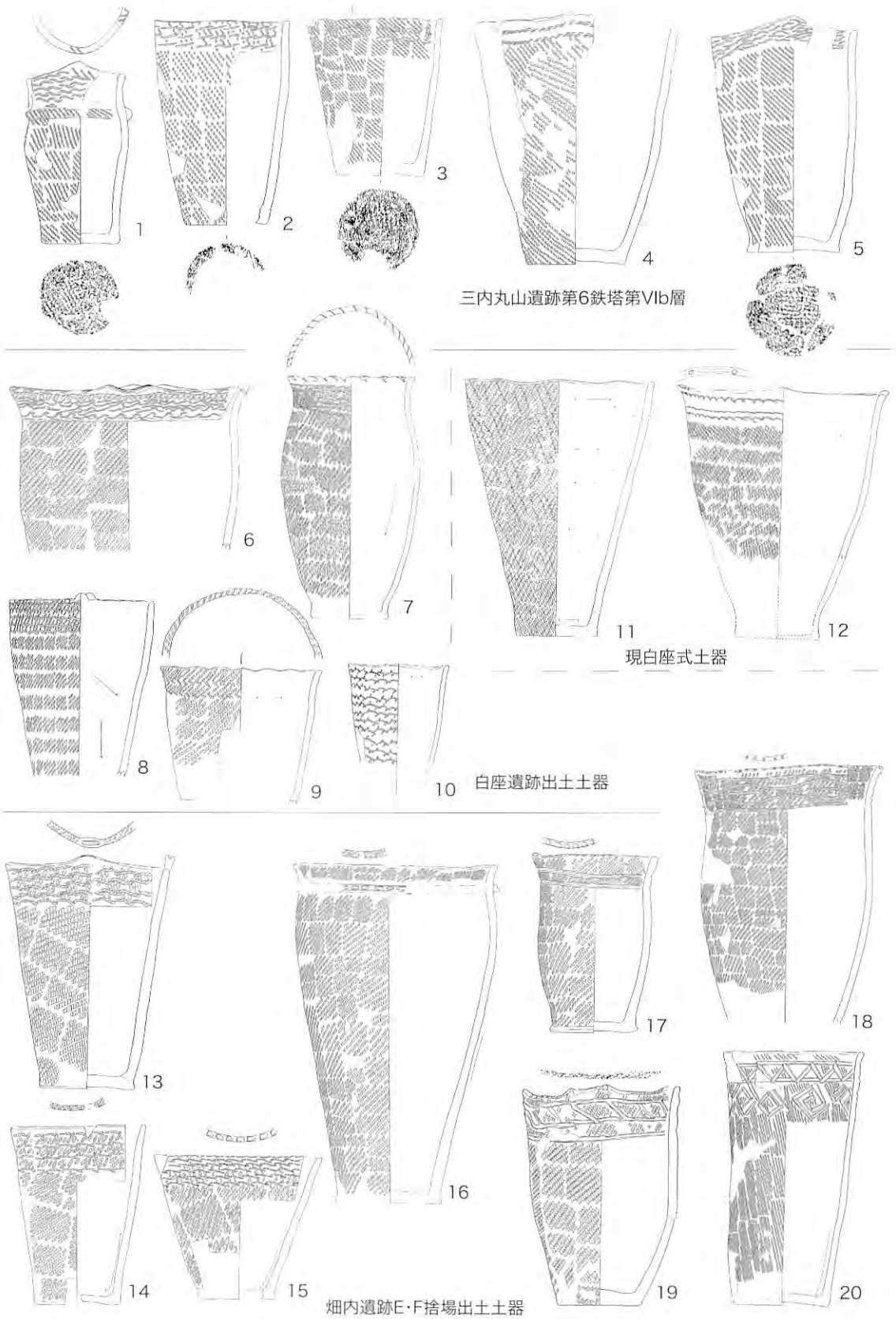
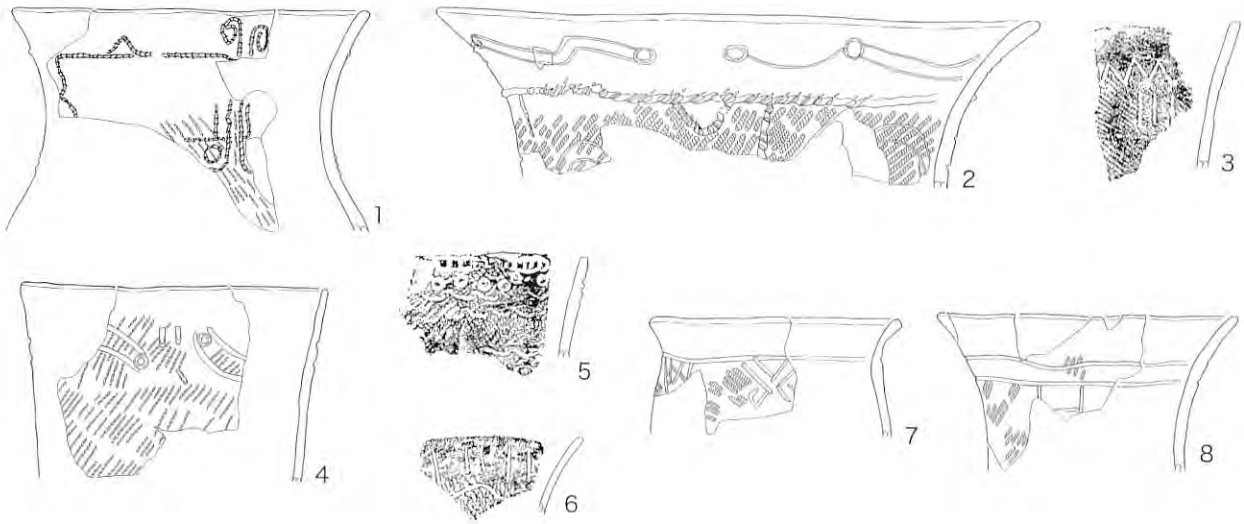
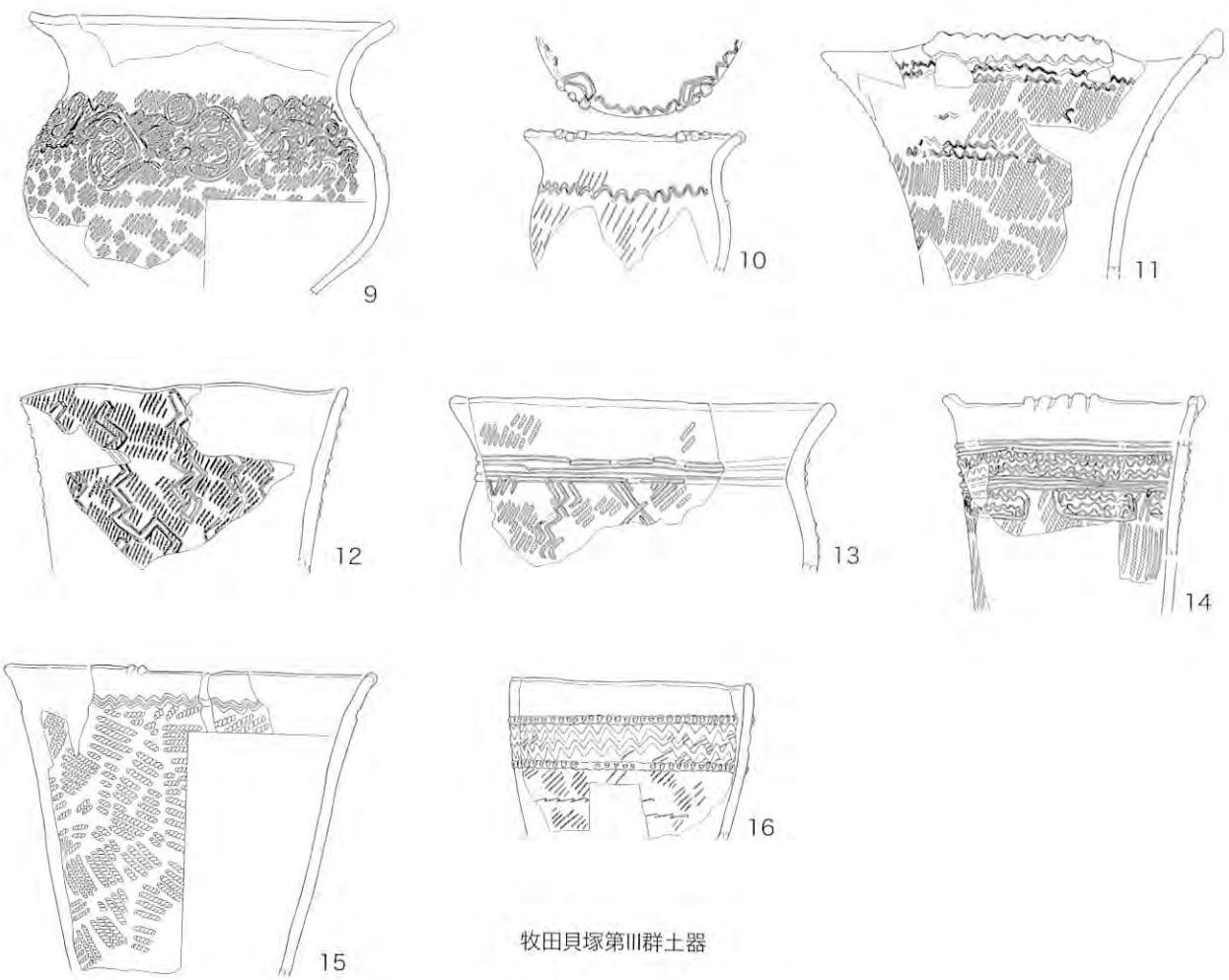

1
2
3
4
5
三内丸山遺跡第6鉄塔第Ⅵb層
6
7
8
9
10
11
12
現白座式土器
白座遺跡出土土器
13
14
15
16
17
18
19
20
畑内遺跡E・F捨場出土土器

図７　円筒下層ａ式土器.



牧田貝塚第II群土器



牧田貝塚第III群土器

図8　大木3～4式土器.

には円文（2, 4, 5）や鋸歯状文（3）が特徴的である。円文は単独で施文されるものより円文を起点とした沈線が併せて施文されることが多い。鋸歯状文も同様に単独で施文されるものより他の文様と併せて施文されることが多い。大木2式まで見られた結節回転文はほとんど見られない。大木2式との比較では，主文様が口縁部付近に構成される大木2式までと違い，胴部中位付近にまで文様帯が拡大している事が大きな違いであると考えられる。

区画帯：明瞭な文様区画帯は見られない。

胴部文様：斜縄文（LR・RL）が主体となり，基本的に横位回転されるようである。縄文原体は2b式に続き蔓状の素材を用いることが多く，原体の末端を結縛するものが多い。

胎土：基本的に繊維は含まれない。

大木（だいぎ）4式（図8：9–16）

図には牧田貝塚第III群土器の一部を図示した。11は大木5式の可能性も捨てきれない。

器形：胴部中位に膨らみを持ち，口縁部が外反する器形（9, 10, 13）や，口縁部がラッパ状に外反する器形（11），ほぼバケツ形の器形（12, 14–16）で構成されるようである。底部は平底である。

口縁形状：平縁が基本であり，刻みを持つ幅広の突起（14）や，小粘土塊を貼り付けた突起などが特徴的である。

口唇端部：断面形はやや丸みを帯び四角張るものが多い。

口縁部文様：大木3式に続き口縁部に無文帯を形成するものが多い。主文様は幅の狭い2本1単位の沈線や刻みの施されない細隆線などにより，胴部中位付近に幅広く施文されることが多い。

区画帯：大木3式同様に隆線や沈線などの区画帯が見られるが，全てに見られるものではない。

胴部文様：斜縄文（LR・RL）が多く基本的に単節のものが多い。回転方向は横位が気泡のようであるが，斜位や縦位も見られ，大木3式以前と比べ回転方向は一定ではないようである。縄文原体端部の結縛は基本的に見られなくなるようである。

胎土：繊維は含まれない。

3．To-Cuとの上下関係が不明瞭な土器群

ここではいわゆる深郷田式と大木2b式についてその特徴を列記し，加えていわゆる白座式の問題も検討する。

深郷田（ふこうだ）式（図9：1–9）

深郷田式は青森県中里町深郷田遺跡より出土した土器群について，白崎高保により命名された。設定当初の特徴は，外面に斜縄文や撚糸文が施文され，内面に貝殻条痕を持つ平底の深鉢形土器である。現在最も良好な資料として考えられているのは，青森県大鰐町砂沢平遺跡第2群土器や同県碇ヶ関村永野遺跡前期第4類土器などである。いずれも日本海側の資料であり，太平洋側では明確に深郷田式に比定できる資料は少なく，To-Cuとの上下関係も不明瞭である。図9上段には深郷田式として永野遺跡前期第4類土器を，中段には太平洋側に見られる深郷田式に類似する土器群として寺下遺跡第VI群土器，上里遺跡第II群3類土器を，下段には円筒下層a式に伴うと考えられる深郷田式に類似する土器をそれぞれ示した。

器形：底径と口径の差が大きいバケツ形の器形で口縁部付近はやや外反するものが目立つ。底部形態については，上げ底や平底等が見られるが，特徴的なのは，底径の小さいものが一定量あるせいか内底面が平坦にならずに尖底深鉢の様な断面形状が見られることである（2, 7, 9など）。

口縁形状：平縁主体であるが波状も存在している。波状の場合4単位が基本である。

口唇端部形状：丸みを帯び，面取りはなされない。

口唇端部施文：基本的に端部への施文は無いが，刻みや縄文施文なども極少量見られる。

口縁部文様：口縁部文様帯は基本的に形成されないが，胴部に使用された原体の側面圧痕が口縁部に数条見られる場合がある。

胴部文様：単軸絡条体第1類（斜位から横位回転が多く，縦回転はほとんど無い）や，単節・複節の斜縄文（横位回転施文がほとんど），附加条（横位回転）などが見られる。0段が右撚りの原体が多数（7割以上）を占める。

胎土：繊維を多量に含む。その他，内面に貝殻条痕が下地調整として見られるものがあるが，その後のミガキ調整により消えているものもあると考えられるため，全ての土器に見られるものではない。

分布：東北地方北部の日本海側と北海道南西部に分布するが，太平洋側においても，口縁部から胴部全面にわたり単軸絡条体を横位または斜位に回転施文するという特徴に注目するのであれば，類似する資料は散見される。そういった資料については詳細な検討がまだ不十分であるが，To-Cu下位から出土するものに関しては，0段右撚りのものが目立ち，To-Cu上位（円筒下層a式に伴い出土しているもの）に関しては，0段左撚りである場合が多いようであり，注意すべき視点かと思われる。

大木（だいぎ）2b式（図10）

図には大木2b式～3式と考えられる良好な資料として大日向II遺跡と南部工業団地内遺跡出土の遺構一括資料を提示した。学史的にはS字状連鎖沈文（結節回転文のバリエーションの一つ）が施文されることが大木2a式との

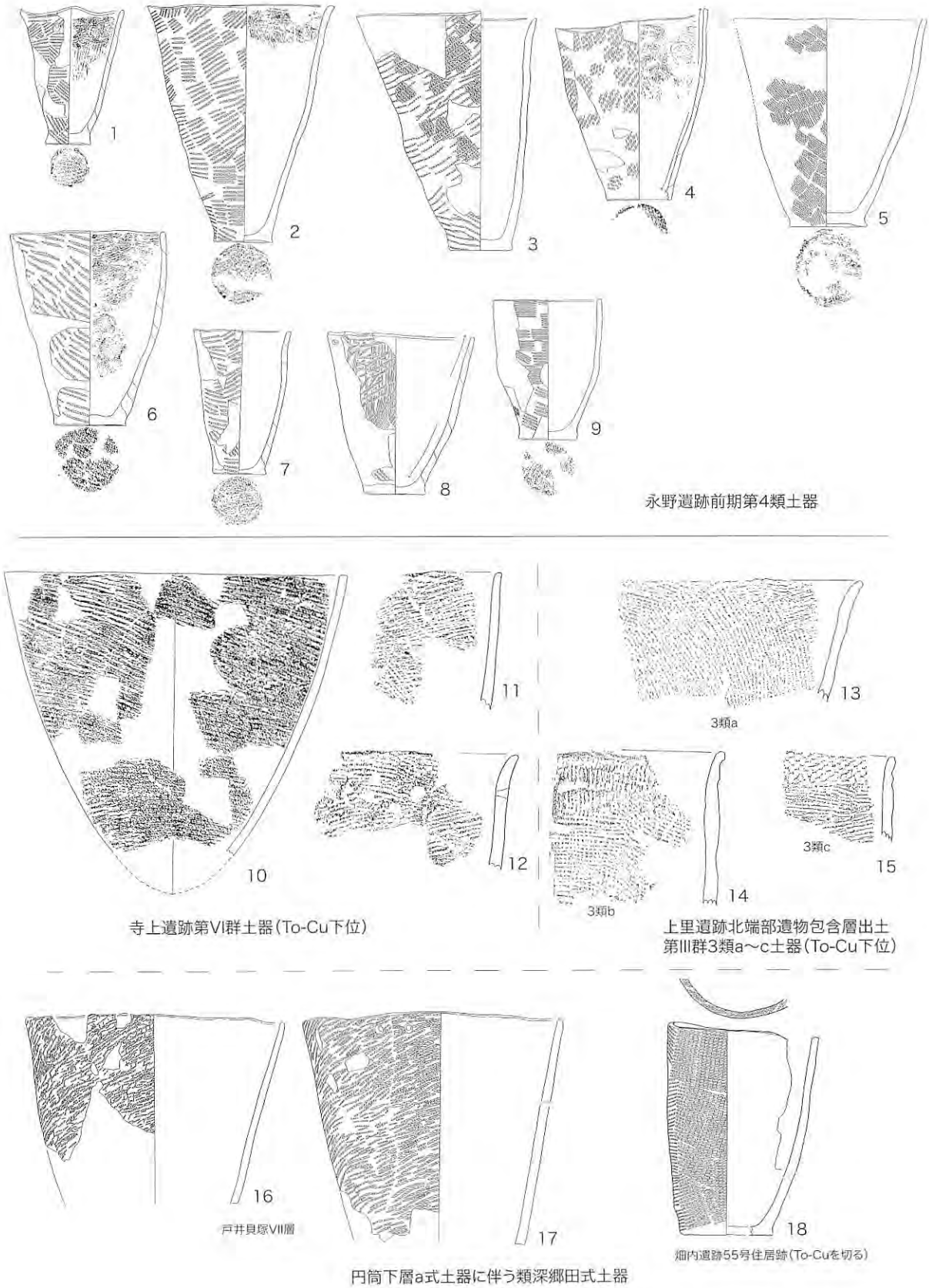
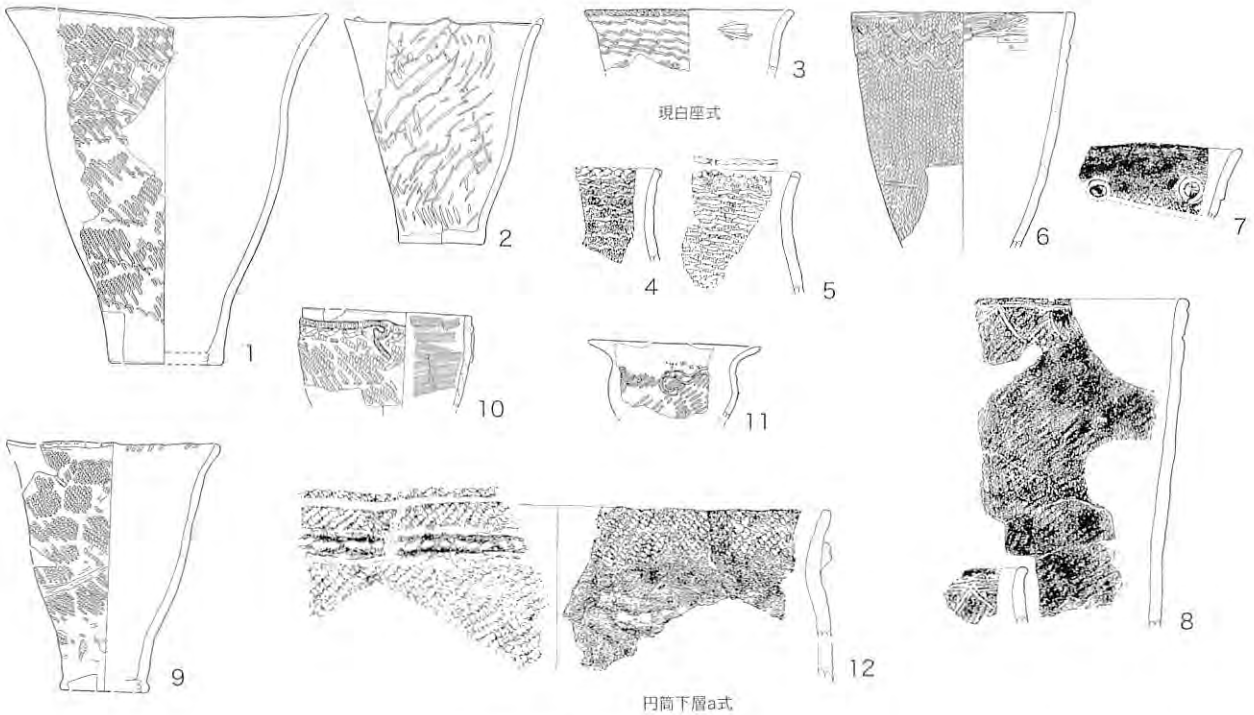
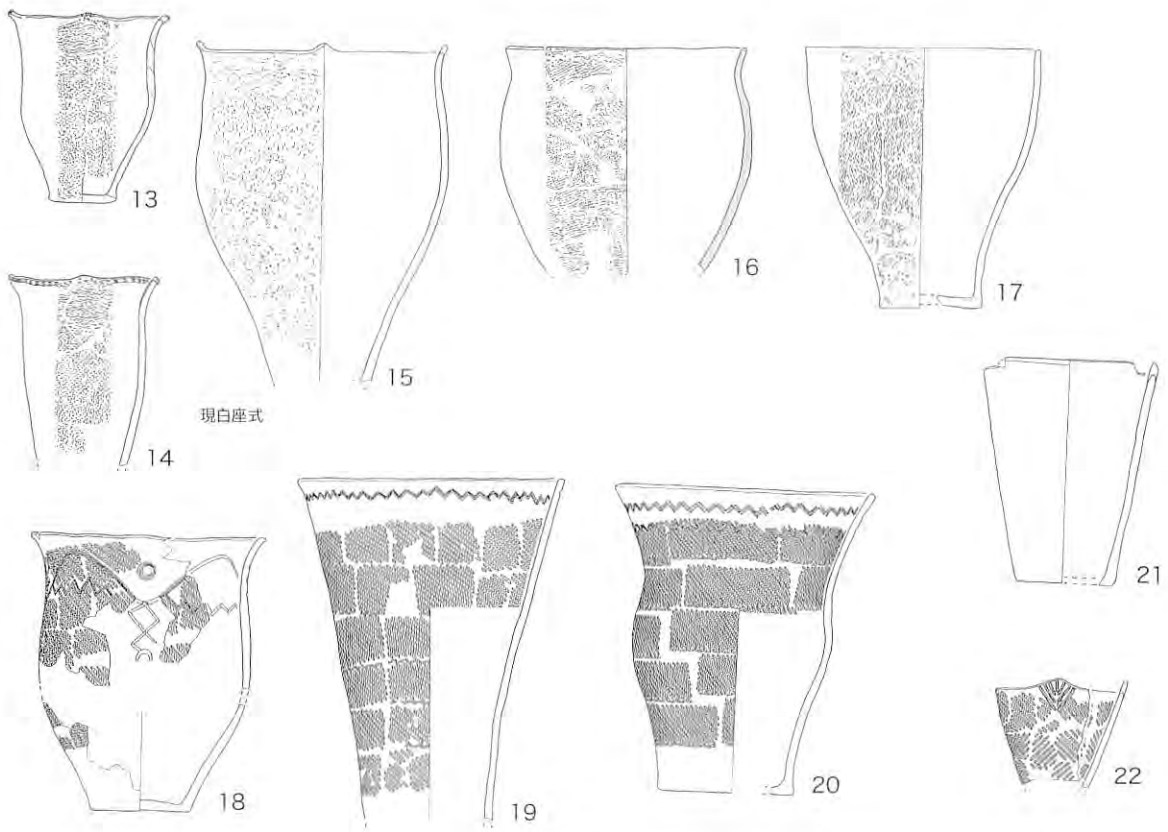

1
2
3
4
5
6
7
8
9
永野遺跡前期第4類土器
10
11
12
寺上遺跡第VI群土器(To-Cu下位)
13
3類a
14
3類b
15
3類c
上里遺跡北端部遺物包含層出土
第III群3類a～c土器(To-Cu下位)
16
戸井貝塚VII層
17
18
畑内遺跡55号住居跡(To-Cuを切る)
円筒下層a式土器に伴う類深郷田式土器

図9 深郷田式土器.



大日向II遺跡OIV07住居跡



南部工業団地内遺跡G区025号竪穴住居跡出土土器

図10　大木2b式～3式土器.

違いであるとされるが，現状では良好な一括資料に欠ける。

器形：胴部中位に膨らみを持ち，口縁部が弱く外反する器形と，バケツ形あるいは口縁部が弱くラッパ状に開く器形（8, 19）が基本のようである。底部は平底であり，外面は平坦なものがほとんどである。

口縁形状：平縁を基本とするが，波状もある。ただし波状の場合山形状の突起に近い形状が多い。単位数は4単位が基本である。

口唇端部：断面形は2a式のように先端部の肥厚は顕著に見られず，やや丸みを帯び四角張るものが多い。端面は磨かれる。端部には希に刺突や沈線が見られるものの他には基本的に施文されないが，端部外面に刻みの施された細い（幅5 mm程度）粘土紐の貼り付けや刻みが施されるものがある。

口縁部文様：口縁部文様帯は基本的に狭い無文帯が形成されるものが多い。また，結節回転文が施文（不整・葺瓦状・S字状連鎖沈文）されるものもある。さらに文様帯が胴部中位まで拡大する例や，鋸歯状文や円文も散見され，大木3式との連続性を想起させるものである。

区画帯：幅約0.5～1 cm程度の隆帯及び粘土紐の貼り付けが見られるが，文様を区画するというより文様構成の一部と捉えられるものがほとんどである。上面に細かい刻みが施されるものが多く，やや太めのものには上面に指頭圧痕が見られるものが多い。

胴部文様：斜縄文（LR）や，附加条，結節回転文（S字状連鎖沈文が多い），単軸絡条体1A・5類，4本丸組紐回転文が見られる。縄文原体は蔓状の素材を用いることが多く，原体の末端を結縛するものが多い。このような素材を用いたものの中には2のように原体の構造が不明なものが少なくない。回転方向はほぼ横位である。

胎土：繊維を含むものとそうでないものがあるが，含むものに関してもその量は非常に少ない。

白座（はくざ）式（図11）

白座式とは，青森県階上町白座遺跡出土第2群土器について，「これらの土器群は，円筒下層a式土器を土台として，大木2a式土器の影響を強く受けたものであると考える。――中略――そこでこれらの土器群を円筒土器文化と大木系土器文化の接触として生まれ，両方の影響を強く受けた土器として「白座式土器」と仮称しておきたい」という内容で杉山武により仮に設定されたものである（杉山，1987）。当時太平洋側における円筒下層a式の出土事例は少なく，日本海側の資料と対比した際にあまりに異なる部分が目立ったため，南に隣接する大木2a式に類似性を求め，円筒下層a式と大木2a式双方の影響を受け成立した土器型式の可能性を示した。その後主に岩手県や北海道南西部において図に示したような非常に類似した土器が広範囲にわたって出土することがわかった。それぞれの報告中では，それらの土器を「白座式」と類似するとして，白座遺跡出土土器（3）を例にあげている。したがって今日「白座式」として理解されている土器は，杉山が設定した当初の内容とずれが生じている事が指摘できる。

ここでは，今日的な「白座式」（以降，現白座式）について，筆者が知り得る範囲でその特徴を整理する。

器形：胴部中位～下位に膨らみを持ち，口縁部が外反する器形が基本のようである。底部は平底であり，底部から胴部下位がすぼまる器形が多い。

口縁形状：波状口縁や突起を持つ場合が多く，平縁も見られる。波状口縁の場合4単位が基本のようである。

口唇端部：断面形は大木2a式のような先端部の肥厚は見られず，やや丸みを帯び四角張るものが多く，端面は磨きあるいは面取りが行われる。端部上面に沈線が施文される例がある。端部外面に刻みの施された細い（幅5 mm程度）粘土紐の貼り付けや刻みが施されるものがある。

口縁部文様：口縁部文様帯は結節回転文が施文（不整・葺瓦状・S字状連鎖沈文）されるものが多い。希に結節回転文施文後に鋸歯状の沈線（5）や円文（8）が施文されることがある。12の様に地文のみのものも存在する。

区画帯：基本的に隆帯や側面圧痕などを用いるような，口縁部と胴部の文様区画帯は存在しない。

胴部文様：斜縄文（LR・RL）や，附加条，4本丸組紐回転文，非結束羽状縄文等が見られる。縄文原体は蔓状の素材（節の内部に繊維の圧痕が見られないもの）を用いることが多く，原体の末端を結縛するものが多い。回転方向は横位回転である。

胎土：繊維を含むものとそうでないものがあるが，含むものに関してもその量は非常に少ない。

上記の土器群は，北海道南西部（噴火湾沿岸）から東北地方南部（岩手県南部）まで広く分布している。しかし，これらとTo-Cuの上下関係は明瞭ではなく大木2b式の様相と近似している。数遺跡で円筒下層式土器や，大木2b～3式，深郷田式類似土器群などと一緒に出土しているようであるが，現白座式と捉えられる土器群がある時期に限定された土器であるのか，または他型式の組成の一部を担うものなのかは今後検討を要する。現白座式とは，上記の特徴を持った広範囲に分布する土器の種類といえよう。

4．型式学的な特徴から考えられる縄文時代前期土器群の変遷についての問題提起

ここでは，前項までにまとめた各土器群の型式学的な整理から得られた情報を整理し，今後への問題提起を行う。

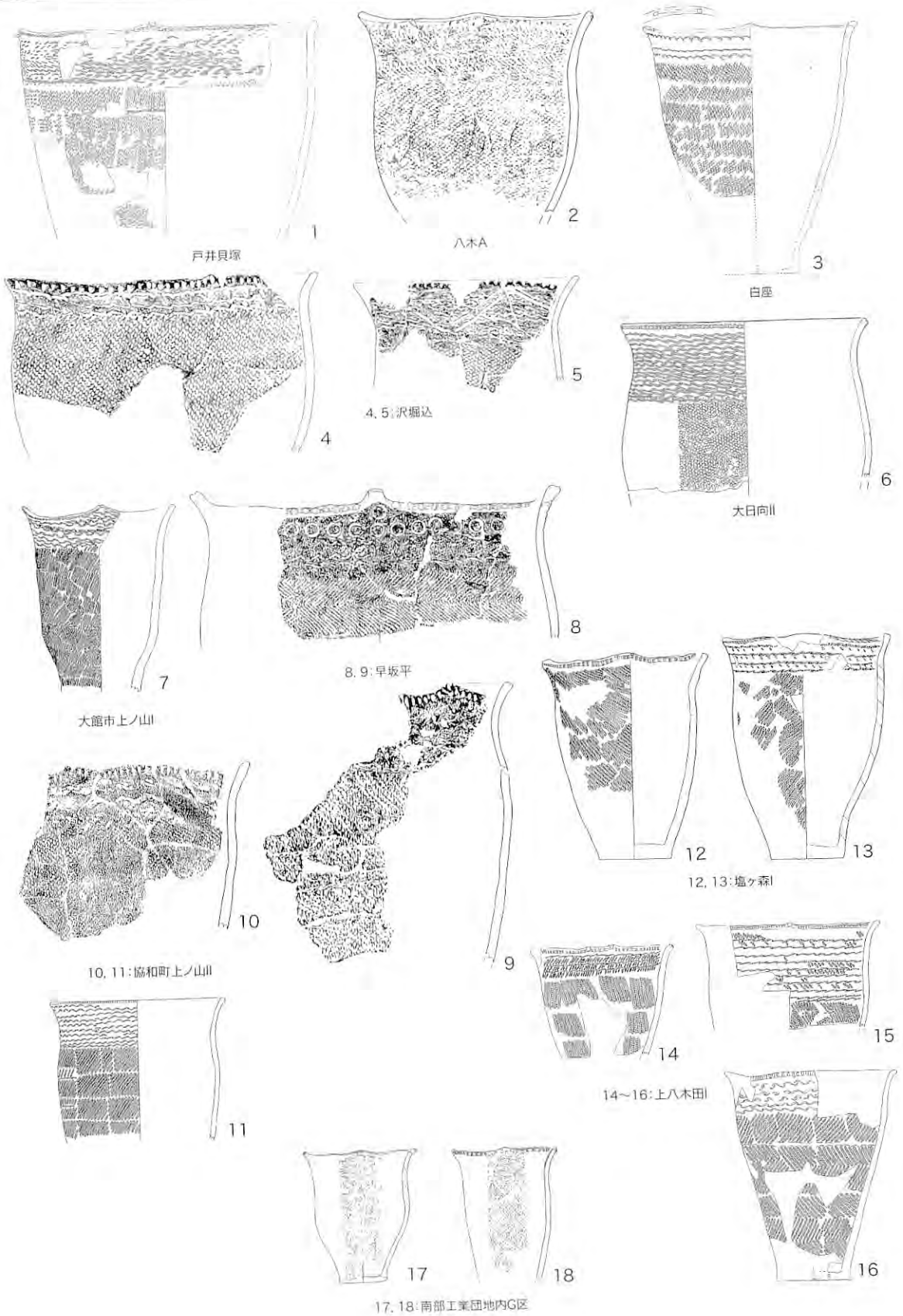

1
戸井貝塚
2
八木A
3
白座
4
4, 5：沢堀込
5
6
大日向II
7
大館市上ノ山II
8
8, 9：早坂平
9
10
10, 11：協和町上ノ山II
11
12
13
12, 13：塩ヶ森I
14
15
14～16：上八木田I
16
17
18
17, 18：南部工業団地内G区

図 11　白座式土器.

1）To-Cu 下位土器群の特徴について

To-Cu 下位土器群（大木1～2a 式・表館式・早稲田6類土器）については，土器型式を越えた以下の二つの特徴が見られる。①胎土中に繊維を含む土器群である。②0段多条の縄文原体を用いることが多く，0段の撚り方向はほぼ左右均等であることが多い。したがって To-Cu 下位土器群については，土器型式を特徴づけるような目立つ属性においてそれぞれに個性が看取されるものの，目立たない属性については共通する要素も多分にあることがわかる。

2）To-Cu との上下関係が不明な土器群（深郷田式・大木2b 式）について

大木2b 式は，その内容が未だ不明瞭ではあるが，口縁部や胴部に結節回転文（S字状連鎖沈文）を施文するなど，直前型式である大木2a 式との共通点が多い，したがって大木1式から大木2b 式までは漸進的な変化を遂げた土器群であるといえる。後続すると考えられている大木3式との関係については，大木3式自体に不明な点が多い。また現状では，大木3式は，結節回転文と口縁部文様帯の消滅や，文様帯の胴部への拡大，沈線及び隆線による文様構成の発達などの点で，大木2b 式との連続性がはっきりとは見られないと考えられているようであり，前期大木式の中での画期として捉えられている様である。ただし，大木3式の内容が明らかになっていない現状においては，このとらえ方も定かではない。むしろ型式の捉え方次第では，漸進的な変化をしているともいえそうである。深郷田式は直後に位置すると考えられる円筒下層a式や直前に位置すると考えられる早稲田6類土器との相違点が多い。ちなみに大木2b 式では繊維の混入が希薄になるが，深郷田式には繊維が多く混入している。この点は円筒下層a式と深郷田式との共通点である。

3）To-Cu 上位の土器群について

大木3式については，先述したとおり不明な点が未だに多く，To-Cu 降下が土器様相の変化に影響を及ぼしたかどうか定かではない。大木1式から2b 式までと，大木4式から6式まではそれぞれ漸進的な変化を遂げることが明らかになっているが，そのなかで大木2b～3式以降の土器胎土への繊維混入が見られなくなる事実は重要である。

円筒下層式はa式からd式まで漸進的な変遷過程を示すことが明らかであるため，下層a式の成立以降は安定した土器様式になったと考えられる。しかし，従来指摘されているとおり円筒下層a式と直前型式といわれる深郷田式との間には，内容を細かく吟味するにつれヒアタスを認めざるを得ない。両型式の共通点は，土器胎土中への繊維混入や，縄文主体の文様構成であること等が挙げられるが，その反面結節回転文の採用や，縄文原体の最初の撚り方向が全く逆であることなど，基本的な部分での相違点が多いことも浮かび上がった。したがって，現状で円筒下層a式に最も類似する土器は現白座式であるといえる。

IV まとめ

本稿のまとめと今後の研究課題などについて記述する。

1. To-Cu を鍵層とした円筒式土器と大木式土器の併行（並行）関係

1）To-Cu と大木2a～3式の関係について

大木式土器と To-Cu の調査事例をまとめてみると，大木2a 式とする土器は概ね To-Cu の下位で出土している。また，該期の包含層や竪穴住居が検出された遺跡事例からは，かなりの頻度で To-Cu が検出される傾向にある。大木2a 式については，To-Cu 降下期より古い可能性が極めて高い。

大木2b 式と To-Cu の上下関係については，各遺跡事例によって若干の相違がある。現段階での筆者の見解は，大木2b 式が To-Cu より古いか，若しくは大木2b 式が To-Cu を跨ぐ（To-Cu の上下で出土する）可能性で捉えている。大木2b 式が To-Cu の下位か上位か若しくは跨ぐのかという問題は，具体的に活字で言及した論文などは知らないが岩手県の発掘関係者の間でも長い間議論されている内容であるが，決定的な結論を見ない。調査事例から上下関係が明確に掴めないことは，大木2b 式が To-Cu 降下時期に限りなく同時期に存在した土器であることを暗示するものかもしれない。

大木3式と To-Cu の関係については，現段階では明確な事例がないものの，先行する大木2b 式の出土状況や早坂平遺跡，沢田2遺跡，大日向II遺跡の事例を相対的に捉えると，To-Cu の降下時期より新しいと思われる。

2）To-Cu と円筒下層a式の関係について

To-Cu と円筒下層a式土器の関係について，畑内遺跡，大日向II遺跡の事例から円筒下層a式は To-Cu 降下時期より新しいと判断される。ただ若干懸念される点として，To-Cu と円筒下層a式の関係を明確に捉えた事例が少ないことが挙げられる。大木2b～3式においても同様であるが，To-Cu 降下期の直前や直後に存在した土器を層位的に確認（判断）することは，よほどの好条件に恵まれなければ困難なことと考えられる。

3）To-Cu と深郷田式の関係について

To-Cu と深郷田式の関係については，第III章で触れたとおりその分布域が日本海側（To-Cu の分布範囲外）に集中しているため，明瞭にはつかめていない。これは大木2b

式と似たような状況を検討すべきである。深郷田式の認定基準についてもさらに掘り下げる必要性を強く感じるが，その際に縄文原体における0段の撚り方向と使用される原体の正確な構造について注意する必要がある。

4）To-Cuの上下関係からみた円筒下層a式と大木式土器の併行関係

To-Cuを鍵層として現段階での円筒下層a式土器と大木式土器の併行（並行）関係を推察する。大木1～2a式はTo-Cu下位，大木2b式はTo-Cu下位若しくは上下から，大木3式はTo-Cu上位，円筒下層a式はTo-Cu上位と考えられる。よって，円筒下層a式は大木2a式より新しい位置づけとなることが有力である。円筒下層a式と大木2b式の関係については，大木2b式がTo-Cuの下なのか若しくは跨ぐのか現時点で結論は出せないものの，To-Cuの関連事例を総括的に捉えると，大木2b式の発生は円筒下層a式より古く，存続期間が重なる可能性が考えられようか。円筒下層a式と大木3式の関係については，両者ともTo-Cuの上位であることは合致をみると捉えられるが，並行関係を証明できる事例が少ない。しかしながらこれらを考える上で，現白座式の問題を詳細に検討することが，円筒下層式の成立と大木式との併行関係を解明する大きな糸口となることは明らかである。

2．今後の課題

1）To-Cuと大木2b式の関係

大木2b式がTo-Cuの上位なのか下位なのかの問題を明らかにすることは，円筒下層a式と大木式の並行関係の解明にも繋がる重要事項である。大木2b式がTo-Cuの上下から出土している要因（原因？）としては，大木2b式の捉え方（特定方法）や新段階の存在（大木3式との境界）などにも関係する可能性が高い。これまでの前期大木式は，大木2b式に関わらず仙台湾周辺地域を中心に東北地方南部で出土する資料を指標として捉えられてきているが，東北地方中部～北部の該期土器の実態や内容を明らかとすることが必要と思われる。今後は大木2a式～大木3式の良好資料を模索した上で，型式学的な比較検討を踏まえ，大木2b式の内容提示を課題としたい。

2）To-Cuの残存状態

調査時に観察されたTo-Cuが一次堆積なのか二次堆積なのかという問題である。二次堆積であると特定された場合であっても時期を反映しているのかどうか，後世の再堆積の疑いがないかどうかである。山際で地滑り現象の起こりやすい地形に立地する遺跡資料より，比較的平坦な地形に立地する遺跡資料を優先して捉えることなどが必要なのかもしれない。

3）To-Cuの降下に関わる問題

いわゆる安家火山灰と言われる種類のテフラは（本稿のB種とC種に相当），その実態に不明な要素が多い。具体的には白色や，オレンジ色，黄色，肌色など同じ遺跡で検出された場合でも，その色調が異なる場合がある。すなわち，顔つきが相違することに起因して，To-Cuが一枚なのか複数枚あるのかと言う問題が浮上する。熊谷常正氏からは複数枚あるのではないかとの指摘を受けたことがある。複数枚あったと仮定した場合，その降下時期が土器の型式編年に関係するほどの時間差なのかどうかといった別の問題も生じよう。なお，追記として，岩手県田野畑村和野I遺跡の捨て場中に見られたTo-CuはC種とした白色を呈するテフラであるが，同じ田野畑村に所在し2 km程の位置関係にある和野ソマナイ遺跡の陥し穴に見られたTo-CuはB種とした黄色を呈し，同一地域においても様相が異なる。菊池強一氏によると岩泉町安家付近にはTo-Cuが1 m以上の層厚を持つ地点があり，下位から白色→オレンジ→黄色→黒ボク土化した部分の順で連続して堆積しているらしい。ただし，降下時期が複数とは捉えられないとの教示を受けた。

4）土器の型式編年に関わる問題

東北地方における縄文時代前期初頭～中葉における土器編年研究は，近年の資料増加に伴い，層位・型式両面から再度検討すべき点が多いと考えられる。今回層位の点でTo-Cuがその鍵になることが判明したが，他にも北海道南西部地方に分布する駒ヶ岳g火山灰等についても今後検証していくべきである。土器形式の方面では，現在設定されている型式について，型式を越えて広範囲に分布する属性と，ある型式内にのみ現れる属性をより具体的に明らかにし，その関係を追っていくことが大事であると考えられる。例えば大木1式と表館式・早稲田6類との関係や，大木2b式と現白座式・円筒下層a式との関係などに見られるように，型式同士の境界が不明瞭な部分（属性を共有すること）が多い場合，どの型式と即断できかねる場合が多いため，それらを分別する際には各型式の保有する属性の量比が重要になる。山内清男は縄文原体の種類・構造について明らかにしたが，材質等の面にも注意を払っている。また，『日本先史土器の縄文』（山内，1979）で明らかにされていない縄文原体についてもその構造を今後明らかにする必要がある。当該地域の縄文土器は，地文に縄文を施文するものがほとんどである。今一度，縄文原体に対し，細かい注意を払うことが肝要かと思われる。

謝　辞

本稿執筆に際し，辻　誠一郎，松山　力，菊池強一，小田川哲彦，小笠原雅行，山崎　武，福田裕二，新海和広，森　淳，須原　拓，中川重紀，日下和寿，高木　晃，安達尊伸の各氏よりTo-Cuや前期土器について御教示を受けた。末筆ながら記して感謝申し上げる。また，平成16年7月に急死された小田野哲憲氏には，文献，報告書などの手配に憂慮いただき，また本論考の着眼点などについてもご助言をいただきました。心より追悼の意を表します。

引用文献・参考文献

阿部千春．1993．八木A遺跡・ハマナス野遺跡．南茅部町埋蔵文化財調査団，南茅部町．

相原淳一．1990．東北地方における縄文早期後葉から前期前葉にかけての土器編年．考古学雑誌 76: 1–65.

赤石　登・高瀬克範．2004．和野I遺跡発掘調査報告書．岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第452集．岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター，盛岡．

千葉周司．2002．青森県階上町小板橋（2）遺跡発掘調査報告書．青森県階上町教育委員会，階上町．

茅野嘉雄．2002．いわゆる結節回転文から見た円筒下層a式について．専修考古学 No. 9: 3–23.

遠藤正夫ほか．1980．永野遺跡．青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第56集．青森県教育委員会，青森．

江坂輝弥，編．1970．石神遺跡．森田村教育委員会，森田村．（再版．1976．ニューサイエンス社，東京）

藤田亮一ほか．1980．大鰐町砂沢平遺跡．青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第53集．青森県教育委員会，青森．

福田友之．1986．考古学からみた「中振浮石」の降下年代．弘前大学考古学研究 No. 3: 4–18.

畠山　昇ほか．1979．むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報．青森県埋蔵文化財調査報告書第56集（102号遺跡所収）．青森県教育委員会，青森．

畠山　昇ほか．1981．表館遺跡．青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第61集．青森県教育委員会，青森．

桧森好宏・大高博康・三島國夫 1988．大地野遺跡．井川町教育委員会，井川町．

星　雅之．2002．十和田中振テフラ降下期集落の検討．岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要 No. 21: 1–16.

星　雅之・須原　拓．2004．岩手県の発掘調査事例からみた十和田中振テフラ．岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要 No. 23: 1–22.

市川金丸．1976．泉山遺跡発掘調査報告書．青森県埋蔵文化財調査報告書第31集．青森県教育委員会，青森．

稲野彰子ほか．1993．南部工業団地遺跡I．北上市埋蔵文化財調査報告書第9集．北上市教育委員会，北上市．

井上克弘．1982．東北地方北部の火山灰．考古風土記 No. 7: 1–41.

石岡憲雄．1999．東北地方前期（円筒下層式）．縄文時代 No. 10: 118–127.

伊藤昭雄．1996．上蛇沢（1）遺跡発掘調査報告書．青森県埋蔵文化財調査報告書第198集．青森県教育委員会，青森．

菊池強一ほか．1981．北上山地東部に分布する縄文前期火山灰について．東北地理 33-1: 57–58.

北村忠昭．2004．早坂平遺跡発掘調査報告書．岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター調査報告書第437集．岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター，盛岡．

小林　淳・辻　誠一郎．1994．小三内遺跡発掘調査報告書．青森市埋蔵文化財調査報告書第22集．青森市教育委員会，青森．

小谷地肇・鈴木正志・成田和世．1998．向山（6）遺跡．青森県下田町埋蔵文化財調査報告書第11集．下田町教育委員会，青森．

興野義一．1968．大木式土器理解のために（III）」考古学ジャーナル No. 18: 8–10.

興野義一．1996．山内清男先生供与の大木式土器写真セットについて．「画龍点睛―山内清男先生没後25年記念論集―」（山内先生没後25年記念論集刊行会編），215–224．山内先生没後25年記念論集刊行会，会津若松．

工藤　大．1995．木造町田小屋野貝塚．青森県郷土館調査報告第35集．青森県郷土館，青森．

工藤　大ほか．1989．表館（1）遺跡：試掘調査報告書．青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第121集．青森県教育委員会，青森．

熊谷常正．1983．岩手における縄文時代前期の土器群の成立．岩手県立博物館研究報告 No. 1: 45–65.

栗村知弘・松山　力．2001．中里（2）遺跡；発掘調査報告書．十和田湖町教育委員会，十和田湖町．

町田　洋・新井房夫．2003．新編火山灰アトラス．東京大学出版，東京．

丸山浩治・丸山直美．2000．上台遺跡発掘調査報告書．岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター調査報告書第334集．岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター，盛岡．

松山　力・大池昭二．1986．十和田火山噴出物と火山活動．十和田科学博物館 No. 4: 14–21.

松山　力ほか．1975．五戸町中ノ沢西張遺跡・古街道長根遺跡．青森県埋蔵文化財調査報告書第29集．青森県教育委員会，青森．

松山　力・千葉正人ほか．1984．和野前山遺跡発掘調査報告書．青森県埋蔵文化財調査報告書第82集．青森県教育委員会，青森．

松山　力・木村鐵二郎ほか．1997．畑内遺跡IV．青森県埋蔵文化財調査報告書第211集．青森県教育委員会，青森．

三浦啓介ほか．1989．表館（1）遺跡．青森県埋蔵文化財調査報告書第120集．青森県教育委員会，青森．

三浦謙一．1987．飛鳥台地I遺跡発掘調査報告書．岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター調査報告書第120集．岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター，津南村．

三宅徹也．1974．青森県における円筒下層式土器群の地域的展開．北奥古代文化 No. 6: 11–27.

村越　潔．1974．円筒土器文化．雄山閣，東京．

村田晃一．1980．今熊野遺跡II　縄文・弥生時代編．宮城県文化財調査報告書第114集．宮城県教育委員会，仙台．

武藤康弘．1988．東北地方北部の縄文前期土器群の編年学的研究．考古学雑誌 74: 29–51.

武藤康弘．1991．東北地方北部の縄文前期土器群の編年学的

研究 II. 考古学雑誌 76: 1–15.
長尾正義. 1999. 小山田（2）遺跡・天狗森（3）遺跡発掘調査報告書. 三沢市埋蔵文化財調査報告書. 三沢市教育委員会, 三沢.
中村五郎（山内先生没後 25 周年記念論集刊行会）, 編. 1996. 画竜点睛－山内清男没後 25 周年記念論集－. 山内先生没後 25 周年記念論集刊行会, 会津若松.
名久井文明. 1971. 青森県芦野遺跡の土器群について. 考古学雑誌 57: 125–149.
成田滋彦・岡田康広. 1983. 長者森遺跡. 青森県埋蔵文化財調査報告書第 74 集. 青森県教育委員会, 青森.
小田川哲彦. 2003. 栖館遺跡. 青森県埋蔵文化財調査報告書第 342 集. 青森県教育委員会, 青森.
小田川哲彦・茅野嘉雄ほか. 2002. 畑内遺跡 VIII. 青森県埋蔵文化財調査報告書第 326 集. 青森県教育委員会, 青森.
小田川哲彦・増尾智彦. 1995. 上蛇沢（2）遺跡. 青森県埋蔵文化財調査報告書第 177 集. 青森県教育委員会, 青森.
小笠原健一郎. 2002. 権現前遺跡発掘調査報告書. 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター調査報告書第 384 集. 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター, 盛岡.
小笠原善範. 1980. 桔梗野工業団地造成に伴う埋蔵文化財試掘報告書. 青森県埋蔵文化財調査報告書 51 集. 青森県教育委員会, 青森.
小笠原雅行. 1998. 三内丸山遺跡発掘調査報告書 IX. 青森県埋蔵文化財調査報告書第 249 集. 青森県教育委員会, 青森.
小笠原雅行. 1999. 大矢沢野田（1）遺跡発掘調査報告書. 青森県埋蔵文化財調査報告書第 270 集. 青森県教育委員会, 青森.
小笠原雅行. 2000. 円筒下層 a 式といわゆる白座式について－現状とその問題の把握－.「村越潔先生古稀記念論集」（弘前大学教育学部考古学研究室 OB 会編）, 33–52. 弘前大学教育学部考古学研究室 OB 会.
大池昭二. 1972. 十和田火山東麓における完新世テフラの編年. 第四紀研究 11: 228–235.
大沼忠春 1985. 道南の縄文前期土器群の編年について（II）. 北海道考古学.
斎藤　岳. 1993. 小奥戸（1）遺跡. 青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第 154 集. 青森県教育委員会, 青森.
酒井宗孝. 2000. 上野平遺跡発掘調査報告書. 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター調査報告書第 333 集. 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター, 盛岡.
佐々木清文ほか. 2000. 沢田 I 遺跡発掘調査報告書. 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター調査報告書第 318 集. 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター, 盛岡.
笹森一朗・茅野嘉雄ほか. 1999. 畑内遺跡 V. 青森県埋蔵文化財調査報告書第 262 集. 青森県教育委員会, 青森.
佐瀬　隆. 1990. 馬場 II 遺跡・沖 I 遺跡発掘調査報告書. 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター調査報告書第 152 集. 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター, 津南村.
佐藤浩彦. 2002. 新田 II 遺跡発掘調査報告書. 遠野市埋蔵文化財調査報告書第 13 集. 遠野市教育委員会, 遠野市.
佐藤達夫. 1983. 東アジアの先史文化と日本. 438 pp. 六興出版, 東京.
佐藤智雄ほか. 1992. 戸井貝塚 1. 戸井町教育委員会, 戸井町.
関　豊. 1981. 中曽根 II 遺跡発掘調査報告書. 二戸市教育委員会, 二戸.
設楽政建. 2002. 大矢沢野田（1）遺跡発掘調査報告書. 青森市埋蔵文化財調査報告第 61 集. 青森市教育委員会, 青森.
杉山　武. 1989. 白座遺跡・野場遺跡（3）発掘調査報告書. 階上町教育委員会, 階上町.
鈴木克彦. 1986. 上北町古屋敷貝塚—遺構編—. 上北町埋蔵文化財調査報告書第 2 集. 上北町教育委員会, 上北町.
高木　晃. 1998. 大日向 II 遺跡発掘調査報告書：第 6 次～第 8 次調査. 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 273 集. 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター, 盛岡.
高橋亜貴子. 1992. 東北地方縄文時代前期前葉組縄縄文について.「東北文化論のための先史学歴史学論集—加藤稔還暦記念—」（加藤稔先生還暦記念会編）, 593–632. 今野印刷, 仙台.
高橋憲太郎ほか. 1995. 崎山貝塚. 宮古市文化財調査報告書 44 集. 岩手県宮古市教育委員会, 宮古.
高橋與右衛門・鈴木克彦・小林　克. 1983. 東北地方北部の遺跡と火山灰の検討. 考古風土記 No. 8.
田中寿明ほか. 2004. 向田（18）遺跡. 野辺地町文化財調査報告書第 14 集. 野辺地町教育委員会, 野辺地町.
瀧澤幸長, 七崎　修. 2001. 法師岡遺跡・西張（3）遺跡発掘調査報告書. 福地村埋蔵文化財調査報告書第 3 集. 福地村教育委員会, 福地村.
手塚新太. 2002. 釜石市沢田 2 遺跡発掘調査報告書. 釜石市埋蔵文化財調査報告書第 1 集. 岩手県釜石市教育委員会, 釜石市.
富樫泰時. 1993. 総論. 考古学ジャーナル No. 362: 2–8.
鳥居達人. 2002. 沢田 2 遺跡発掘調査報告書. 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター調査報告書第 396 集. 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター, 盛岡.
戸沢充則. 1994. 縄文時代研究辞典. 東京堂出版, 東京.
辻　誠一郎・植田弥生・南木睦彦. 1994. 小三内遺跡低地域の古環境.「小三内遺跡発掘調査報告書」（青森市教育委員会編）, 125–133. 青森市教育委員会, 青森.
上野秀一. 1978. 白老町虎杖浜 2 遺跡. 白老町教育委員会, 白老町.
山内清男. 1937. 縄文土器型式と細別と大別. 先史考古学 1-1.
山内清男. 1979. 日本先史土器の縄文. 先史考古学会, 東京.
吉田　充. 2004. 小松 I 遺跡発掘調査報告書. 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター調査報告書第 433 集. 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター, 盛岡.

(2005 年 8 月 20 日受理)

付表1　十和田中振テフラ（To-Cu）を検出した主な遺跡

No	遺跡名	所在地	中振テフラに関わる事例	種類	立地	標高(m)	文献など	分析
1	畑内遺跡	南郷村	下層b式土器使用の埋設土器がTo-Cuを切る。下層a式の捨て場直下にTo-Cu層	A	河岸段丘	90–95	青埋文セ・66,000 m², 青埋文報211・252・326集等	有
2	白座遺跡	階上町	捨場II層直下に薄く堆積	A?	丘陵地	100–115	階上町教委468 m², 1987階上町	
3	寺上遺跡	十和田市	To-Cu直上で円筒下層a・直下で大木2式・早稲田6類等が出土	A	河岸段丘	65–66	十和田市教委573 m², 1999十和田市8集	
4	中里(2)遺跡	十和田湖町	To-Cu直下で早稲田6類出土	A	河岸段丘	105–110	十和田湖町教委1173 m², 2001十和田湖町1集	
5	小山田(2)遺跡	三沢市	基本土層	A	丘陵	15–20	三沢市教委3020 m², 1999三沢市17集	
6	上蛇沢(2)遺跡	五戸町	基本土層	A	丘陵頂部～斜面部	105	青埋文セ9245 m², 1995青埋文報177集	
7	和野前山遺跡	八戸市	To-Cuを含む層より下位から早稲田6類などが出土	A	舌状台地	20	青埋文セ11,000 m², 1979青埋文報82集	
8	長七谷地2号遺跡	八戸市	To-Cu直下で大木2式出土	A?	段丘	18	青埋文セ492 m², 1980青埋文報54集	
9	小三内遺跡	青森市	To-Cu下位より早稲田6類・大木1式・表館式出土	C?	段丘	10–30	青森市教委5850 m², 1993青森市52集	有
10	大矢沢野田(1)遺跡	青森市	To-Cu下位から早稲田6類・表館式・大木1式が出土	C?	丘陵	12–14	青森市教委1200 m², 1998青森市52集	
11	向田(18)遺跡	野辺地町	To-Cu上位で円筒下層d1式土器出土	C?	河岸段丘	8–30	野辺地町教委8447 m², 2004野辺地町第14集	
12	大和田遺跡	十和田市	To-Cu下位から長七谷地III群出土	A	丘陵地	40	青埋文セ1000 m², 1998青埋文報235集	
13	櫛館遺跡	八戸市	To-Cu下位から早稲田6類c？出土	A	河岸段丘	10–20	青埋文セ5000 m², 青埋文報342集	
14	米沢遺跡	二戸市	陥し穴1，基本層序III層，中振下に早期・前期初頭土器	A	河岸段丘	104–105	岩埋文20,249 m², 1988・2002岩埋文報第132・376・402集	
15	下村遺跡	二戸市	包1（中振上から大木2・深郷田式出土，流れ込み），住居1，土坑7，溝2，基本層序IV層	A	丘陵の麓	105–110	岩埋文12,730 m², 2000岩埋文第323集	
16	上村遺跡	二戸市	包1（中振上より円筒下層a式?），住居1，土坑10，基本層序VI層	A	河岸段丘	105–120	岩埋文4871 m², 2002岩埋文第375集	
17	沢内B遺跡	二戸市	包1（中振下より尖底土器と大木1式相当），基本層序IVC層	A·B	舌状台地	106	岩埋文600 m², 1978岩埋文第7集	
18	上台遺跡	二戸市	基本層序IV層	A	丘陵地斜面	145–150	岩埋文4034 m², 2000岩埋文第334集	
19	中曽根II遺跡	二戸市	住居8（中振上下より大木2b式土器），基本層序VI層	A	河岸段丘	101–104	二戸市27,000 m², 1981二戸市教委	
20	沖I・馬場II遺跡	二戸市	基本層序。陥し穴1(To-Cu降下直前に構築？)，基本層序IIIC層	A	河岸段丘		岩埋文2100 m², 1990岩埋文第152集	
21	上里遺跡	二戸市	包1，基本層序III層	A	河岸段丘	137–143	岩埋文10,000 m², 1983岩埋文第55集	
22	大日向II遺跡	軽米町	住居複数あり（中振二次堆積層より円筒下層a式），基本層序IV層	A	丘陵傾斜面	163–186	1986・1995・1998岩埋文第100・225・273集	
23	叺屋敷IB遺跡	軽米町	住居2，ピット16，陥し穴6，基本層序IV層	A	丘陵斜面地	174–194	岩埋文12,740 m², 1981岩埋文第63集	
24	長倉I遺跡	軽米町	包1（中振混入層から円筒下層d式），基本層序IV層	A	山麓緩斜面	285–296	岩埋文3346 m², 2000岩埋文第336集	
25	和当地I遺跡	軽米町	包，中振下より早期土器，基本層序III層	A	河岸段丘	215–222	岩埋文1700 m², 1997岩埋文第259集	
26	釜石遺跡	一戸町	包1（中振下より早期土器・大木1–2式），基本層序III層	B	谷底平野	365–374	岩埋文5000 m², 2002岩埋文第402集	
27	上野B遺跡	一戸町	包1（中振層中～上より円筒下層a式），土壙1，陥し穴1，基本層序III層	A	河岸段丘	170–175	一戸町1740 m², 1983一戸町文調報5集	
28	田代遺跡	九戸村	包1（中振上より円筒下層d式以降），基本層序IV層，中振上土器あり	A	洪積段丘	259–262	岩埋文1611 m², 1982・1998岩埋文第41・262集	

付表 1 （続き）

No	遺跡名	所在地	中掘テフラに関わる事例	種類	立地	標高 (m)	文献など	分析
29	田代 IV 遺跡	九戸村	包 1（中掘層中より大木 2 式，層はかなり動いている），基本層序 III 層	A	低位段丘	265–300	岩理文 3440 m², 1995 岩理文第 223 集	
30	田代 VI 遺跡	九戸村	包 1（中掘層中より大木 2 式?），基本層序 III 層	A	低位段丘	275–285	岩理文 1000 m², 1995 岩理文第 223 集	
31	長興寺 I 遺跡	九戸村	包 1（中掘上より円筒下層式），住居 2（中掘再堆積層より円筒下層 a–b2 式），住居状 3，土坑 15，基本層序 V 層	A	谷	320–370	岩理文 13,600 m², 2002 岩理文第 388 集	
32	広沖遺跡	浄法寺町	包 1（中掘下より早期土器・大木 1 式），住居 1，基本層序 IIIB 層	A	丘陵の傾斜地	198–204	岩理文 1590 m², 1986 岩理文第 111 集	
33	飛鳥台地 I 遺跡	浄法寺町	基本層序 V 層	A	河岸段丘	200–220	岩理文 2273 m², 1988 岩理文第 120 集	
34	沼久保遺跡	浄法寺町	基本層序 IVB 層	A	丘陵地	230–245	岩理文 5930 m², 1986 岩理文第 109 集	
35	五庵 III 遺跡	浄法寺町	包 1（中掘下より早期土器 – 大木 2a 式土器），基本層序 IIB–IIC 層	A	山麓丘陵	237–249	岩理文 3114 m², 1986 岩理文第 112 集	
36	ゴッソー遺跡	種市町	包 1（中掘 二次堆積層下より早稲田 6 類，上で白座式?），陥し穴 1，基本層序 IIB 層	B	低位段丘	20–35	岩理文 7636 m², 1996・2001 岩理文第 238・357 集	
37	明神遺跡	久慈市	基本層序	A?	丘陵斜面地	15–37	岩理文 8300 m², 1991 岩理文第 150 集	
38	大芦 I 遺跡	久慈市	包（中掘上下土器あり），基本層序 V 層	B	谷底平野	161–174	岩理文 3120 m², 1989 岩理文第 306 集	
39	力持遺跡	普代村	住居・土坑複数（中掘下より前期前葉～中葉土器?）	B-C	谷底平野	55–68	岩理文 6642 m², 2001–2003 調査	
40	和野 I 遺跡	田野畑村	捨て場 1（中掘上より円筒下層・前期大木式）	C	海岸段丘	180	岩理文 2479 m², 2004 岩理文 452 集	有
41	和野ソマナイ遺跡	田野畑村	陥し穴数カ所	B	海岸段丘		岩理文 2003 調査	
42	平波沢 I 遺跡	田野畑村	中掘と関連した遺構?・遺物あり	B			田野畑村 2003–2004 調査	
43	大芦赤空洞遺跡	田野畑村	包 1（中掘下より前期前葉土器），土坑 2，基本層序 IV 層	B-C	海岸段丘	194–196	田野畑村 750 m², 2000 田野畑村文調報第 5 集	
44	崎山貝塚	宮古市	安家火山灰下位より大木 1 式（第 I 群土器）	B	海岸段丘	115	宮古市 2479 m², 1995 宮古市文調報 44 集	
45	早稲栃 II 遺跡	宮古市	包 1（二次堆積中掘下より大木 2 式?），基本層序 IV 層	B	谷底平野	120–140	宮古市 135 m², 2003 宮古市埋文調報 61 集	
46	沢田 I 遺跡	山田町	住居 21（中掘下より大木 2a–2b 式）	B	谷底平野	12–35	岩理文 12,160 m², 1994–1997・1999 岩理文第 318 集・342 集	有
47	沢田 2 遺跡	釜石市	包 1（中掘上下で早期土器～前期大木式，中掘直上は大木 3 式が多い），住居 1	B	河岸段丘	50	岩理文 3554 m², 2002 岩理文第 396 集	
48	上鷹生遺跡	大船渡市	包 1（中掘下より前期前葉土器），基本層序 IV 層	B	崖錐性扇状地	152–156	岩理文 1300 m², 1997 岩理文第 253 集	
49	上甲子遺跡	大船渡市	包（中掘層下で早期土器，中掘層中より大木 2 式?），基本層序 V 層	B	扇状地の緩斜面	257–265	岩理文 3640 m², 1997 岩理文第 254 集	
50	雲南遺跡	陸前高田市	包（中掘上下より前期大木式）	B	山麓斜面	7–30	2003 岩手考古学会研究大会発表資料	
51	秋浦 II 遺跡	岩手町	基本層序 IId 層と III 層の間	A?	小起伏山地	240	岩理文 2680 m², 2000 岩理文第 347 集	有
52	上八木田 I 遺跡	盛岡市	基本層序 II 層	A?	山地縁辺	260–270	岩理文 22,400 m², 1995 岩理文第 227 集	
53	上八木田 II 遺跡	盛岡市	基本層序?	A?	山麓緩斜面	26 0	岩理文 6000 m², 1993 岩理文第 194 集	有
54	南部工業団地内遺跡	北上市	住居 1（中掘層に前期土器）	B	舌状台地	73–83	1993 北上市埋文調報第 9 集	
55	奈良崎 II 遺跡	大東町	包 1，住居 4（中掘下より前期前葉土器），基本層序 II 層	B	段丘	170	大東町 1199 m², 2003 大東町文調報第 26 集	
56	西山遺跡	大東町	包 1，住居 22（中掘下より前期前葉土器），基本層序 IIA 層	B	谷	145–149	大東町 533 m², 1999 大東町文調報第 21 集	

付表1 （続き）

No	遺跡名	所在地	中振テフラに関わる事例	種類	立地	標高 (m)	文献など	分析
57	大明神II遺跡	大東町	包1（中振下より大木1式土器?），基本層序V層	B	河岸段丘	138	大東町 3800 m², 1995 大東町文調報第16集－第一次・第二次	
58	上野平遺跡	藤沢町	包1（中振上下より前期大木式）	B	丘陵先端部	194–200	岩埋文 2526 m², 2000 岩埋文第333集	
59	上水沢II遺跡	大野村	包1（中振下より円筒下層a式?，大木2式か），基本層序IIIA層（土器はIIIC層出土）	A·B	谷底平野	230	岩埋文 1364 m², 2002 岩埋文第391集	
60	権現前遺跡	遠野市	住居5（中振下より大木2a式），基本層序IIIA層	B	河岸段丘	308	岩埋文 1180 m², 2001 岩埋文第384集	有り
61	久重沢遺跡	遠野市	基本層序	B	河岸段丘	283	岩埋文 1449 m², 2002 岩埋文第423集	有り
62	綾織新田遺跡	遠野市	包1，住居8（大木2b–4式），小竪穴3，土坑6，道路跡1，基本層序III層	B	高位段丘	272	遠野市 19,000 m², 2002 遠野市埋文調報第13集	有り
63	小松I遺跡	住田町	基本層序III層（中振下より前期土器）	B	崖錐性扇状地	190–210	岩埋文 5899 m², 2004 岩埋文第433集	有り
64	早坂平遺跡	山形村	前期土器	B	河岸段丘	229–234	山形村 30 m², 岩埋文 1735 m², 1991 山形村埋調報2集，2004 岩埋文第437集	
65	大渡II遺跡	湯田町	基本層序	B	河岸段丘	260–280	岩埋文 55,900 m², 1995 岩埋文215集	有り

付表2 前期初頭－中葉にかけての主な遺跡（To-Cu未検出）

No	遺跡名	所在地	特記事項	種類	立地	標高 (m)	文献など	分析
67	虎杖浜2遺跡	白老町	現白座式・大木3式土器出土	-	海岸段丘	46–48	北海道埋文 172・158集（2001・2002），白老町 1977・2000等	
68	八木A・B遺跡	南茅部町	盛土を伴う。円筒下層a式・現白座式・大木2b式・深郷田式類似土器出土	-	海岸段丘	30–35	南茅部町調査団4–6集（南茅部町 1993・1995・1997）等	
69	日の浜砂丘I遺跡	恵山町	大木2式・表館式?・早稲田6類?出土	-	海岸砂丘上	10	恵山町，537 m²，1986	
70	高屋敷川遺跡	戸井町	早稲田6類類似土器出土	-	丘陵先端部	24–40	戸井町，1664 m²，戸井町 2001	
71	戸井貝塚	戸井町	円筒下層a式・現白座式・深郷田式類似土器・若生式出土	-	丘陵先端部	3–10	戸井町，5150 m²，戸井町 1992・1993等	
72	102号遺跡	六ヶ所村	大木2a・大木2b式土器出土	-	丘陵上	20–46	青埋文，2118 m²，1979，第48集	
73	砂沢平遺跡	大鰐町	深郷田式土器出土	-	丘陵上	150	青埋文，10,300 m²，1980，第53集	
74	水野遺跡	碇ヶ関村	深郷田式土器出土	-	丘陵上	180	青埋文，13,000 m²，1980，第56集	
75	上ノ山I・II遺跡	大館市	円筒下層a式・現白座式出土	-	河岸段丘	70–85	秋田県，4230 m²，1988，第173集	
76	池内・萩ノ台遺跡	大館市	円筒下層a式出土	-	河岸段丘	63–65	秋田県，27,760 m²，1997・1999，第268・282集等	
77	湯前遺跡	田沢湖町	円筒下層a式・現白座式出土大木2式?出土	-	舌状台地上	254–270	秋田県，1030 m²，1999，第290集	
78	上ノ山II遺跡	協和町	大木2b?–4式出土	-	河岸段丘	45–50	秋田県，24,500 m²，1988，第166集	
79	横間II遺跡	安代町	円筒下層a式出土	-	河岸段丘	320	岩埋文，1400 m²，1999，第303集	
80	塩ヶ森I遺跡	雫石町	現白座式出土	-	河岸段丘	190	岩埋文，約5000 m²，1982，第31集	